

芥川だより

発行日***2019年2月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624



***** 一部200円です *****



ありがとう

デイサービスから帰った婆さんを迎え、夕食を運び薬を混ぜる。「ゆっくり、しっかり食べてや」と言いながら、私は車いすにかけられたデイからの袋を持って部屋を出る。一軒隣の自宅に帰りデイの日報を見る。血圧、食事、入浴など記された項目の中で一番気になる排便の欄に目をやる。有るか無いか問題なのである。

介護をしていて一番気になるのが排便・排尿だからである。排尿は多くてもさほど問題ではないが、風邪を引いたときの下痢便には非常に困らされる。リハビリのおかげで何とか立てるようになったものの油断せずにテキパキと処理をしなければ、倒れこまれる危険があるからだ。しゃがみ込まれると立ち上がらせるのに非常な労力を使わなければならない。

婆さんを支えながら、紙おむつを降ろし便座に座らせパンツと紙おむつを脱がし新しいのに着せ替える。最初は、何ともごち無かったが、慣れてくるとそれなりに出来るようになるが、婆さんの右手は自由が利くので思い切り叩いたりつねったりするから危険が一杯である。

食事の後は、リハビリ病院の看護師さんが作ってくれた唱歌や童謡の歌詞カードを机に置くと機嫌よく歌いだす。半時間ばかり経って「もうそろそろ、寝よか」と車いすのレバーを外す。婆さんも「そうやなー、歌を歌っててもしょうがないからなあー」という。車いすをベットのそばに付けて抱えてベットに横たえる。着布団をかけ暖房を確認して「ばあちゃん、おやすみ」というと「ありがとう」と言葉が返ってくる。その時、まだボケてへんやんかという思いに対して、「何言いうとるんや、ありがとうの一言の重みが分からんか！婆さんにとっては精一杯の自己表現なんだ、ボケた頭であんたに感謝してる熱い想いがこの一言なんやで、認知症だと馬鹿にしたらあかん。認知症でも全てを忘れたわけではない。馬鹿になったんやないで！。人の優しさが普通の人より敏感に感じるかもしれないのや。なめたらあかん！認知症を。」という声が聞こえたような気がした。「ハイ分かりました」とつぶやく。

死をめぐるあれやこれ (53)

石川 吾郎

学者の顔をした政商

東洋大の一人の学生が教授である竹中平蔵氏を批判したビラを配布したということで大学当局から退学処分されるか、というニュースが先頃あった。ビラの内容が注目に値するので紹介をしたい。主な内容は次の通り。●竹中氏の禍害、その一つは大規模な規制緩和…二千三年の労働者派遣法の改悪。その後の法律は拡大を重ね、不安定な非正規雇用者が日本中に増大した。「正社員をなくせばいい」「若者には貧しくなる自由がある」といった発言。●昨年の高度プロフェッショナル制度には「個人的には、結果的に対象が拡大していくことを期待している」など驚くべき思惑を公言。今後更なる拡大が予想され労働者は一層使い捨てにされることになる。●様々な利権への関与…竹中氏は人材派遣会社のパソナグループの会長を務めている。労働者派遣法の改悪は、自らが会長を務める会社の利権獲得に通じていたからだ。まさに国家の私物化である。●水道法改正案と入管法改正案についても関与していたことが明るみになっている。更に加計学園との関連も取りざたされており、今後ともこの男の暴走を追及する必要があるだろう。ビラは次のように締めくくられている。「今こそ変えよう、この大学を、この国を…皆さんは恥ずかしくないですか、こんな男がいる大学に在籍していることが。僕は恥ずかしい。そして、将来自分や友達や自分の子どもが使い捨てにされていくのを見ながら、何も行動を起こさなかったことを悔いる自分が、僕は恥ずかしい。意志ある者たちよ、立ち上がれ！…(裏につづく)

民主主義は決して難しいものではない。共に考え、議論し、周りに訴えながら、もう一度みんながこの社会を立て直そう!!」この若者の立派な文章に感動させられる。◆竹中平蔵という人物について補足すると、その肩書きはパソナの会長の他に、オリックスの社外取締役などいくつもがあるが、注目すべきは「日本経済再生本部産業競争力会議」民間議員、「国家戦略特別区域諮問会議」議員といったポスト。これは政府に提言してアベ政権の政策に大きな影響を与える。つまり政府に潜り込み、国民をカモにする政策提起をして実行させ、自分が関わる企業に利益を誘導し、国民を貧困に突き落とすという悪辣な所業を続けている。彼の背後には日本を食い物にしようと狙うハゲタカ・グローバル企業群がいることは明か。このような人物が刑罰に問われないでいるのが、信じられないほど。◆なお来年の東京五輪には二十万人が無償ボランティアで働くが、その管理業務を受注したのがこのパソナであり、都や国からパソナに莫大な資金が支払われることになっている、という事実も見逃せない。尚、この学生は退学処分にはならなかったものの大学から退学勧告を受けた、ということだ。

◆ビラの全文は、ネットで読むことが出来る。「東洋大学生の竹中平蔵氏批判」で検索すると出てくるブロゴスの藤田孝典氏の記事。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 59	坂本一光	2
哲学者の時事放談 9	祖蔵哲	4
大峰真盛道 21	下村嘉明	7
大人の今昔物語 53	石川吾郎	9
B級サラーマン渡世譚 67	明石幸次郎	8
オクラの出たより 29	因一生	11
我がおくのほそ道の旅 23	成瀬和之	16
隠れた歴史 4	満田正賢	17
見えない人	古愨悠	20
編纂後記	嘉	23
ふみの道草 2	山椒魚	24
俳句	土田裕 影山武司	24

芥川だより一四五号 目次 ページ

素老人☆よもだ帳 (59)

坂本一光

◆教えるとは 希望を語ること
学ぶとは 誠実を胸にききむこと

教員の働き方が問題になっている。中央教育審議会では、教員の定数を増やすこともせず、学期中は残業等の長時間労働もやむをえぬこと、学校の休業期間中に休暇を取って労働時間を調整すればよ

い、と言わんばかりの議論が行われている。一方、全日本教職員組合(全教)の調べによると、公立小中学校の非正規雇用教員は現在約九万四千人に上り、教員の六人に一人が非正規で働いているという。背景に何があつたか。

二〇〇〇年代以降、非正規教員を巡る規制緩和は着々と整備されてきた(整備状況については、二〇一九年一月二十八日付け「しんぶん赤旗」による)。二〇〇一年には「公立義務教育諸学校の学級編成及び教職員定数の標準に関する法律(義務標準法)」と「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律(高校標準法)」が改正(という改悪)され、教員定数の欠員を非常勤講師で埋めることを可能にする『定数崩し』が行われた。二〇〇三年には「義務教育費国庫負担法」を改正、国庫負担が二分の一から三分の一に減額され正規教員から非正規教員への置き換えが加速された。さらに二〇〇四年「総額裁量制」が導入され、国の基準に基づき算定された教職員給与総額の範囲内で、自治体が給与額や教職員配置を決定できるようになり、大部分を非正規教員が占める定数外教員にも国庫負担金の利用が可能になった。

九万人を超える教員は、能力や情熱が欠けているから非正規教員にしかたないのではない。公の学校教育の場でも、人件費操作を通して、人間を人間にする労働の価値を貶める行為が平然と行われているようにもなっているのである。

教育は先に生まれた世代が後の世代に対して行う、現在と未来への投資である(注1)。何よりも、教育は現在と未来に生きる子どもたちの成長を支える。しかしそれだけではない。教育は現在と未来の『誰か』にとつての『金儲け』を支えるのであり、こうした所業で『誰か』たちは自ら墓穴を掘り自分で自分の首を絞めているとも言えるだろう。民然り、官然り、政治も然り、目先の十年、いや一年の計も立てられないのだから、いわんや百年の計である。

そんな時にどうかと思うが、素老人は新年早々の夢の中で久しぶりに中学校長となった。しかも教育実習生たちに訓示を垂れた。恥ずかしい限りだが記録にとどめる。

『今日から、教育実習が始まりました。教育学部から、教師をめざす学生の皆さんが実習に参加します。二班に別れて行う実習期間は、それぞれ、今週及び再来週の各一週間と、さらに、九月と一〇月の各四週間です。長期にわたる実習になります。』

今ここにいる私たちの立場は、中学生であり、教育実習生であり、先生であり、皆それぞれに違います。私たちは私たちの学校で出会ったことを大切にしながら、お互いの立場でたくさんの方を学び合いたいと思います。とりわけ教

育実習生の皆さんにはこの機会に、教えることと学ぶことの意味をしっかり考えてほしいと思います。

教えるとは希望を語ること
学ぶとは誠実を胸に刻むこと

という言葉があります。フランスの詩人ルイ・アラゴンが、ナチスドイツに支配されたストラスブール大学をうたった詩の中に出てくる言葉です（注2）。

教えるという言葉は、他者に伝える、あるいは、私たちが人間らしく交流することととらえれば、この言葉は教育に限らず、私たちが生きていくあらゆる世界にあてはまる深い意味をもっていると思います。そして、いつでも私たちにとって一番大切な問題は、私たちは何をどう学ぶのか、それは何のためかをよく考えることです。『教える』というのは、学んで初めて、学びながら初めてできることです。また、私たちは知らないから学ぶのですから、知らないことを恥じる必要はありません。学ばばいいのです。

それでは、学ぶとはどういうことか。あたりまえのことを簡単に言います。想像力を働かせてよく考えてください。

人間が生きてきた世界は、自然も社会も文化も、実に広大で深いものです。人間は、人間になったときから、この世界を理解しようとしてきました。そして、世界について理解したこと、世界の中で

蓄積した財産を、知的にも経済的にも常に次の世代へ継承してきました。だから、個人の成長発展は、いつの時代でもそれまでの人類の成長発展のなかでしか起こりません。このように生きてきた生物は、ヒトだけです。人間が生きてきた世界を知らなければ、その世界から離れては、誰も生きることができない。

私たちは、人間が生きてきた世界を学ぶ。世界を知り、その世界の中に、大げさに言えば人類の歴史の中に、一個人である私を位置付けるのです。永遠と一瞬、誠実を胸に刻むとはその自覚をいうのです。その自覚があれば、私たちはこの社会を、この時代をともに希望を語りながら生きてゆくことができます。

さて、何かを学ぶときには、できれば楽しく学びたいと思います。楽しく学ぶには常に想像力を働かせることが大事です。ほんの一例です。テーマは文法、日本語の文法です。文法というのは、今思いついても腹立たしいくらいに、私にはよくわからなかった。文法を学ぶときにこんな風に思えたらよかったのに、という詩がありました。

練習問題

阪田寛夫

「ぼく」は主語です
「つよい」は述語です
ぼくは つよい
ぼくは すばらしい

そうじゃないからつらい

「ぼく」は主語です
「好き」は述語です
「だれそれ」は補語です
ぼくは だれそれが 好き
ぼくは だれそれを 好き
どの言い方でもかまいません
でもそのひとの名は
言えない

ちよつとした想像力や広がりをもてば、学ぶことはもつともつと楽しくなります。教育実習の期間、教育実習生の皆さんも生徒の皆さんも、困難はあっても楽しく学ぶということを大切に思ってください。今日のはなしは、これで終わります。』
(かたちは心であり、心はかたちになる)

■大分の素老人

(注1) 石川啄木は一九一〇年明治四十三年の評論『時代閉塞の現状 強権 純粹自然主義の最後及び明日の考察』の中で、「教育とは、時代が其一切の所有を提供して次の時代の為にする犠牲だ」と書いている。啄木は「東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹をたはむる」だけの歌人ではなかった。「斯くて今や我々青年は、此自滅の状態から脱出する為に、遂に其『敵』の存在を意識しなければならぬ時期に到達しているのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない、実に必至である。我々は一斉に起つて先ず此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考察 我々自身の時代に対する組織的

考察に傾注しなければならぬのである。明日の考察！これ実に我々が今日に於て為すべき唯一である。そうして又総てである」と言う。石川啄木、『二握の砂・時代閉塞の現状』、宝島社文庫、二〇〇八年。

(注2) 『ストラスブール大学の歌』はフランスの詩人ルイ・アラゴンの作品。『フランスの起床ラップ』(ルイ・アラゴン著 大島博光訳、新日本出版社、一九八〇年)に次のように掲載されている。

ストラスブール大学の歌

陽の色に輝くカテドラル
ドイツ人どもに囚われながら
おまえは倦むこともなく教える
めぐる季節を 月日を 流れる時を
おお ストラスブールのカテドラル

学生たちは別れを告げて逃れ出た
アルザスの空翔ぶ鶴つると
おまえの蓋黴カビ刑憲の思ひ出を
いっばいつめた背負袋を肩に
それは ほんの始まりだ

教えるとは 希望を語ること
学ぶとは 誠実を胸にきざむこと
かれらはおも苦難のなかで
その大学をふたたびひらいた
フランスのまんなかクレルモンに
古今の学に通じた教授たち
審判者の眼差しをもった若者たち
きみたちは そのかくれ家
大洪水の明けの日にそなえた
ふたたびストラスブールへ帰る日に
学問とは永い永い忍耐

だが今、なぜすべてのものが黙っているのか
ナチどもははいりこんできて、殺している
暴力だけがやつらのただ一つの学問だ

やつらは鉄の拳で撒き散らす
われらのかまどの灰までも

やつらは手あたりしだいに撃ち殺す
見よ、教壇にうつ伏したあの屍を
友よ、われらは何を、何をなすべきか

「無垢な幼児たち」の大虐殺を

もしもヘロデ王が命じたとすれば
それは君らのうちよりひとりのキリストが
あらわれて、美しい血の色に
目覚めるのを怖れるからと、知れ

ストラスプールの息子たちは倒れても
だが、空しくは死なないだろう
もしも、かれらの赤い血が

祖国の道のほとりにふたたび咲き
そこにひとりのクレーベルが立ち上がるなら

今よりはかすかずのクレーベルたち
それは百人となり、千人となり
つつく、つつく、市民の兵士たち

われらの山やまに、町まらに
義勇兵とバルチザンたち

われらほどもに行こう、ストラスプールの
二十五年まえの、あの日のように
勝利はわれらの頭上にあるのだ

ストラスプールの、だが何時と君は言うか
よく見るがよい、震えおののくプロシヤ人
どもを

ストラスプールの、プラークの、オスロオの
三つの受難の大字よ

よく見るがいい、銃をつつやつらの姿を

やつらほもう知っている、逃げだす日の近
いのを
敗北こそ、やつらのさだめだと

よく見るがいい、やつらがおのれの運命を
知り
士気もおとろえた、その姿を

死刑執行人どもこそ罪人に変わるのだ
やつらに戦車と手先があつと
やつらを追いだすのだ、今年こそ

武装を解除された英雄たちよ、武器をとれ
ストラスプールのためフランスのため世界
のため

聞け、あの深く、どよもし、どよもし
フランスの声を、祖国の声を
鉤十字の殺人どもは滅びるのだ

陽の色に輝くカテドル
ドイツ人どもに囚われながら
おまえは倦むこともなく数える
めぐる季節を、月日を、流れる時を
おお、ストラスプールのカテドル

*一九四三年十一月、教授、学生が銃殺され、
数百名が逮捕された。

*ストラスプールの生まれの將軍、一七九一年の
革命的人民の義勇軍に参加、ライン軍の司令官
となる。



哲学者の時事放談 (9)

祖蔵 哲

印度旅行記 (前編)

年齢を重ねると新しいことをはじめめる
のに億劫になる。海外旅行となるとなおさ
らである。外国旅行は一般人に比べては
多く経験している。二十歳代には当時プー
ムでアメリカ西海岸の長期旅行をしたし、
哲学の仕事がヨーロッパ大陸、ギリシヤ
やドイツはくまなく回っている。退職後は
南半球を主に世界一周の船旅を経験し、ア
フリカ、南米の各国の主要都市を見て回っ
た。『なんでも見てやろう』の世代である。
しかし、この歳でインドはつらい。若けれ
ば、それこそバックパッカーで行く第一の
国であろうが、一般人にはこの海外旅行ブ
ームの中でもこの国は3K「汚い、危険、
きつい」のゆえに敬遠されがちである。そ
れが行くことを決めた理由にはやはり哲
学的な関心からである。

いわゆる「世界四大文明」というものが
ある。最近では日本だけの学説といわれ、
その正統性が疑われているが、メソポタミ
ア、エジプト、黄河そしてインダス文明で
ある。四か所に共通するのは「大河」と「文
字」だ。それ以外は文明と呼ばないとする
とその他は除外される。特に「文字」は「文
明」にとつては最重要であろう。マヤ文明
やアンデス文明は明確な文字をもたなか
ったためにこれらからは除外されている
し、最近では「反・反日」の人たちが「繩

文明」は「黄河文明」よりも古く、それ
故もはや日本は中国の「次男」ではないと
言っている。ちなみに「長男」は韓国らし
い。その韓国でも自分ほうが先だと言いつ
ている。はたして歴史時代的早い遅いに
意味があるのか、そしてそもそもそのもの
に文明に優劣があるのかどうか。ここでも
排外的自国中心主義、ナシヨナリズムの影
響がある。独裁的支配階層による国民の政
治経済的不満を解消するにはこの手法が
いつの時代、地域、どの政治体制を通じて
も最良の方法であることは変わらない。

そのような怪しい「文明説」は考慮しな
くても、インドの文明が多く地域に影響
を与えたのは明白である。特に「仏教」は
多くの地域、歴史を變遷して日本に伝わっ
てきている。しかし、周知のように仏教は
現在のインドにはほぼ残っていないし、そ
の源流思想は現在の日本仏教とは大いに
異なっている。まだその源であるヒンドウ
ー教は全てを飲み込む大河である。その結
果はカオスとなる。まさにインド自体が混
沌カオスの世界である。「ヒンドウー教」
の「ヒンドウー」Hinduはペルシヤ語で、
サンスクリット語の「シンドウー」Sindhu
に由来する。Sindhuは「河」の意味で、
特に「インダス河」をさす。それで、Hindu
は「インダス河周辺の人たち」「インド人」
を意味する。この大河のカオスには全て
がある。さまざま民族が融合し、国内に
数百の言語がある。宗教的にもヒンズー
教は大きな勢力だが、そのほかイスラム

教・カトリック・シーク教・パールシー(ゾロアスター)教・ジャイナ教・仏教など存在する。

インドの歴史を簡略に記すと、紀元前二六〇〇年からの一〇〇〇年間のインダス文明の原インドの後、紀元前一五〇〇年からアリア人が侵入して、さらに一〇〇〇年ほどで古代国家をつくり始め、五〇〇年後の紀元前三世紀ごろに最初の全インド統一国家が完成したらしい。その後ヒンドゥー諸王朝は分裂割拠の状態を繰り返して一〇世紀にはアフガニスタンからのイスラム教に征服され一六世紀のムガル帝国は最大の領土を誇った。その後一八世紀になるとイギリスの植民支配に屈し、第二次大戦後独立を果たした。さてインドの歴史や文化の教科書的な記述はそこらじゅうで知ることができるので、やはりこの記事は体験を話そう。

(1) 日本からインドへ

旅行一日目、関西空港を昼に出発した。インド航空である。直行便は関西からはなく香港経由となる。香港までは三時間半。飛行機の中で待機となる。関空からは半分程の乗客率であったが、大半がインド人と中国人、日本人はわずかである。香港で半数の中国人が降りて、さらに香港の中国人の乗客が入ってきて九割くらい席がうまった。中国とインドは国境問題でいまだに対立関係にあるのでそうは人気がないと思いきや、結構な人達がインド観光に行く。隣の席にインド人がいたので話しかけた。

拙い英語どおしの会話であるが、どうやら金沢のレストランで四日間働いていて今日はカルカッタまでの里帰りらしい。いろいろ話しているとどうやら字がかけないということがわかってきた。すると突然後ろの座席のこれもインド人が彼は字が書けないのだと説明してくれた。どうも不自然な会話であるが、これがカーストであるとその時感じた。隣の彼は四年間も日本で働いていたのに、日本語もうまく話せない。

もともと字が書けない。後ろのインド人はビジネスマンらしく流暢な日本語で話す。生まれながらに階級が固定化され十分な教育を受けられない階層が存在するのだ。ハイテクのインドという先進的なイメージとは裏腹に現実のインドを垣間見た。

香港からはあと六時間ほどでインド・デリーだ。インドと日本の時差は三時間半なので昼二時に関空を飛び立って、経由を含まぬ十一時間程、現地時間夜九時半にデリーの空港に到着した。入国手続きを済まし空港の建物をでると寒い。体感で一〇度くらい。インドは暑いというのは思い込みである。現に当地のインド人はダウンジャケットを着ているのではないか。ある程度の情報で気候対策はしていたが本当だとは。早速バスに揺られてホテルに到着して一日目を終えた。明日の朝は六時初の飛行機でカルカッタへ行くので三時起きた。レストランで遅い夕食を食べ、早く寝る。高年齢オヤジにはハードな旅行である。しかし我々はまだホテルで寝られるだけ良いほうで

ある。件の故郷帰りの彼は空港で夜明けしである。

(2) インドの核心へ

二目の朝は早い。四時間ほどの仮眠状態であるが柔らかいベットの中で寝られることは疲労の回復具合が違う。故郷帰りのかのインド人はまだ三十代、若いから硬い床でも寝られるのであろう。しかし、後で目にするようになるがインドでは普通以外で寝る。彼は例外ではないのだ。さて、また昨日の空港に戻り、飛行機に乗る。国内線であるからインド人はばかりである。満員だ。インド国内の経済が一時停滞していたとは言えまだまだこれからの活力を感じる。カルカッタ、いや今はコルコタと言う。英語読みから本来のベンガル語に二〇〇一年に戻ったらしい。今頃かと思うが英国植民地の時代があまりにも長く、それだけ生活に染み込んでいたのであろう。一八五八年から独立の一九四七年までの約一世紀の支配、その後半世紀も要したのである。この地はイギリス植民地時代の首都機能を果たした。それ以前には一六九〇年に東インド会社がすでにここを拠点としていた。

三時間ほどでコルカタ空港に到着した。そこで偶然、故郷帰りの彼と再会。グッドラックで再び別れた。午前一〇時のコルコタの市内。バスの中からも車の警笛のけたたましい音が溢れている。外を見ると人人。屋上路上で寝ている人、犬、ゴミ。なんでもありの世界である。しかし、よく

見ると牛がいない。バスのガイドに聞くとコルコタやデリーでは町に牛を入れることが禁止されたとか。これには二〇一四年に起きたインドでの政権交代が大きく影響しているようだ。

あまり知られていないがインドは世界で最大の民主主義国と言われたりすることがある。複数政党制や自由選挙制からするとそうなのかもしれない。複数政党といっても現在は中国以外、ロシアでも複数の政党があるが、そのロシアは民主主義国とは大多数が思っていない。だからこの二つが民主主義の条件ではなく、言論の統制や報道の自由がその基準になる。パリに拠点を置く国際NGO団体「国境なき記者団」が毎年発表する「世界報道自由ランキング」なるものがある。この尺度でいくとインドは一三八位である。ちなみに日本は六七位であり、政治レベルでも最も嫌うお隣の韓国四三位にも抜かれるお粗末な状態である。もちろん北朝鮮は最下位の一八〇位、中国は一七六位でロシアは一四八位である。さて、インドは政治制度自体は民主主義であるが、そこは最近の世界事情を反映してポピュリズムが進んでいる。ポピュリズムとは基本的に自国優先主義であり、経済的には実利を優先する新自由主義である。インドンの政党は独立以来の国民会議派が長らく実権を握ってきた。初代首相はネルーであり、マハトマ・ガンジーの信頼が厚い朋友である。しかし、ガンジーの禍根は独立時のイスラム教との対立である。イン

ド内乱や分裂をさけるためイスラム教徒は東西パキスタンに分かれた。ここでも宗教の対立が最大の問題であった。最大多数のヒンズー教徒は一部が過激に走り、ガンディーを暗殺した。いくら寛容主義のヒンズー教であっても建国になればこういった流れになるのだろうか。その過激なヒンズー至上主義のながれを含むのが現在のインド人民党である。二〇一四年に総選挙で圧勝したインド人民党が政権を取ってからは、勢いづいた極右的な人々の言動が活発になりすぎ、本来、牛を大事にすることには宗教的な意味があったのに、近年では本来の意味を離れ、イデオロギーに利用されるようになってしまい、逆にコルコタやデリーからは牛が排除されたようである。現在の首相モディはインド人民党であるが、中道的な政治を目指している。彼は比較的的低カーストの出身であるとして最下層の人氣もつかんでいるらしい。しかし中心層は経済界であり、その意味で変貌するインド経済の象徴にふさわしい。ハイテク企業が集まる南インドのバンガロールはインドのシリコンバレーと呼ばれ技術革新の先端である。また、自動車産業も活発でタタ・モーターズはタタ財団が経営する最大の企業である。四、五年前に世界経済界ではBRICS(ブリックス)という言葉が流行した。ブラジル・ロシア・インド・中国・南アフリカの新興五カ国を言ったものだが現在はどうなっているのか。キーポイントはやはり政治的安定である。そし

て中国の単独成長であろう。余談であるがインドと日本は現在、親密な関係を築いている。国民会議派の時代は非同盟諸国の中心であったので日本からは若干距離があったが、現在の人民党のポピュリズムは安倍政権とは相性がよく、特に共通の敵である中国を介してより結びつきを強化している。中国の覇権主義的な経済構想である新シルクロード「二帯一路」にインドと共同歩調をとろうとしている。『敵の敵は味方』 政治経済構図は単純にきまる。

さて、インドの政治経済から観光の方に戻ろう。しかし今から行くところは観光という場所にふさわしいかどうか。マザーテレサの家である。家といってもそれは修道院の宿舎のようなところである。

アルバニア系カトリックの修道女であった彼女は一九二八年、一八歳でインドに渡り宗教活動を行い一九五〇年に「神の愛の宣教師会」、一九五二年に「死を待つ人の家」設立。一九七九年にノーベル平和賞受賞。一九九七年に亡くなったが、二〇一六年異例の早さでカソリックの聖人になっている。聖人になるには平均で一八〇年ほどかかるらしいが二〇年弱とはやはり早い。さて、そのマザーテレサの家なるものを訪れた。ごく普通の修道院の寄宿舎である。テレサの部屋というのが保存してあったが、貧乏な室内ということをお願いしたのである。私が小ぎらいな部屋でシングルビジネスホテルくらいである。私の部屋の方がもっと狭いと思った。なんでも皮肉

にとつていまいふ爺であるが、このマザーテレサについても称賛の一方では批判も多い。他宗教に対する宗教的強要、他の慈善団体に比べて低い支援の実態、乏しい医療知識など。これらによって彼女の本来の活動自体が否定されるわけではないが、純粋な他利の行為とは何かを再び考えさせるきっかけともなった。次に訪れた「死を待つ人の家」は、またさらに考えさせられるようになった。ドアを開けると広い床にベッド向かい合わせに一〇列ほど並んでいる。このベッドには重症者が利用し、比較的良い状態の人は別に部屋にいるのだとか。別室ではボランティア活動の人が食事の用意をしている。我々、「観光客」は見ているだけ、だけど「募金」をする。しかし、この中には感染性の病気を患っている人もいるとか、本人の意志であるかもしれないが、なぜ病院に入れないのか。「慈善を行う場所」を確保するという宗教的欺瞞を一瞬感じた。実際にこれは日本でも「ボランティアツアー」として商業化されている。係りの人の説明だと日本から来る人が年々減っているのだから残念だと話していた。なんでもすべて近代医療の世話になるというのも考えものであるが、一方でこのような微妙な状態が良いものであるのか再び考えさせられる。

さて、次に訪れたのは、強烈なインドの現状から少し離れた古き良き英国植民地の香りヴィクトリア記念堂とインド博物館。記念堂は一九二二年に当時インド皇帝

も兼ねていたヴィクトリア女王を記念して建てられたものとか。タージマハールをモデルにし純白の大理石を使用した壮大な建物である。インド博物館は当時の東インド会社の領事館を利用したアジア最大の博物館である。これが東インド会社の建物かと感心するくらい壮大な建物である。中の展示物も考古学的に貴重なものばかり、収容物は五万点以上だとか。時間がないので初期仏教時代のエリアを見学する。驚いたことに遺跡からほりだされたレリーフや石彫などはケースなので展示ではなくそのまま。もちろん触つてるのは禁止であるが自由である。実際に明らかに展示物のなかには光沢が違つ箇所がいくつも見られた。長期間に皆が触つてこうなったのであろう。そんな自由な展示の博物館であうが、おそらくはもっと貴重なものは、本国に持ち帰つているのであろうと想像される。悪名高い、盗賊の戦利品展示館である大英博物館にである。植民地時代。自分たちの文化の価値もわからぬ間にわずかな金でかすめ取つた貴重な文化遺産。各国で変換運動も起きているを聞くが。こんな思いでバスに乗り再び喧嘩の町中へ。選挙が近いのかやたらに大きな声がスピーカーから聞こえてくる。車の警笛、大きな声。カオスの町である。二日目は心身ともに疲れてホテルに到着した。

(3) 仏教の故郷へ
三日目の朝はゆつくりであった。ホテルの食事を済ましてバスに乗り向かったの

はコルカタ大学。バスを降りて学内に入る前の道にはぎつしりの露店本屋さんの列。日本での大きなお寺や神社のお祭りでの露店がぎつしり並んで人々が歩くのがやつとという場所を想像するのとぴたり。その屋台が全部本屋。英語、ヒンディー語専門書、雑誌なんでもあり。すごい状態だ。大学の正門をくぐるとさすがに静か。詩人タゴールの銅像が中庭にあった。喧嘩の本屋街を抜けバスに戻って次に行ったのは植物園。ここはさすがに静かでほっと一息つける。広々として敷地では、インドの人たちが輪になりヨガの講習会をしていた。やはり本場のヨガ、少しの時間耳を傾ける。そのそばには大きな森が広がっていた。驚くことに、この森全体は、たったベンガル菩提樹の一株からできているという。世界最大の樹木である。時間も空間もインドは大きい。

すがすがしいコルカタの午前を過ぎ、我々は駅へ向かった。これから特急列車に乗り釈迦が悟りを開いた地、ブッダガヤに行く。インドで初めて見る駅は想像以上の場所である。通路では人が横たわり、中にはアセントのようなものを張っている。ここで暮らしているかのようである。列車が到着したが、ドアはない。人が降りてきても構わぬように我先に乗り込んでいく。車両にはクラスがある。まず大まかには冷房付きと冷房なし。そのなかで寝台付きと座席のみがある。六時間の移動であるが最上クラスともいえる冷房寝台に乗った。そこで

は昼食も配られる。周りはもちろんインド人ばかりであるがやはりハイクラスの雰囲気がある。少し離れた車両には満員でドアのないデッキにぶら下がって乗っている人たちがたくさんいた。インドの鉄道は国営である。鉄道に限らず観光地や公共施設では現地インドの人と観光客には利用料金の差がある。最大では十倍もの差があるらしい。寝台で横になっての快適な旅であるが、外を眺めると沿線にはスラム街が続いている。線路にはいつ洗濯物を干している人々。もちろん線路を歩く人も沢山いる。駅のホームでは牛がいるわ、ロバは運搬車がわりにホームの補修レンガを運んでいる。なんとも言えない世界がずっと広がる。そしてただ広い野原やため池。だんだんと日が沈む。日本にいと西方のインドは天竺であるが、今そこにいると思うと夕日の色もお赤くなる。

ブッダガヤというのは釈迦である仏陀が悟ってからつけられた地名である。もととはガヤの一地域。列車はガヤに到着しバスにのってブッダガヤに向かった。もう夜九時過ぎである。三〇分ほどでブッダガヤのホテルに到着。そこは日本通のインド人が経営するホテルであった。日本式のお風呂があり一服できた。オーナの息子はよく日本にきて、親戚が京都で経営するインドレストランの仕事を時々手伝うのだとか。ついでにインドの土産店にも紹介された。一般にインド人は商売上手である。ムガル帝国というイスラム教国家の支配

が長かった影響もあるかどうか。いよいよ明日から仏教のふるさとを訪ねる。三日目の朝起きて、食堂へ行くと二人の日本人僧侶が来ていた。どうも近くの日本寺から来たらしい。この旅行を計画した日本のお坊さんの伝手で招かれたらしい。話によると、最近では日本寺の影が薄いらしい。この寺はそもそも日本のお寺の各宗派が共同で設立したのであるがだんだんとインドそのものに価値がなくなっており、興味が薄れているとのこと。最近の宗教離れは日本でなくとも世界では顕著で、そもそもお寺を継ぐ人がいなくて、廃寺になるところが多い。インドにまで手がまわれないのは当然であろう。食事はありがたくいただいた、というところで僧侶の案内で日本寺を見学した。駄々広い敷地に寺は立っているがなんとという特徴もない。人の気配もなくなんだか寂しいだけの所という印象であった。さてブッダガヤのなんと言つてもメインは菩提樹の下で悟った場所である。その場所はマハーボデー（大菩提寺）と呼ばれているお寺になっている。

そこまではバスで直接行けずに一端降りて、歩くが電気カートに乗らなければならぬようになっていて。環境保護からであるが、どうも真似事臭い。バイクなどはほとんど走っていない。さて、入場ゲートに到着。お寺といっても日本や中国にあるような寺ではない。高いきらびやかなヒンドゥー教のような塔が中心に立つ寺院である。沢山の人が来ていた。しかし、インド

人ばかりではない。タイやスリランカ、チベットから来ている人たちが圧倒的に多い。大きなスピーカで読経している。おそろくパーリー語であろう。日本のお経に当たるとおもうが全然ちがう。日本のお経はどちらかというと棒読みに近いが、こちらはうねっている。あちらこちらで各国の仏教徒が集まっている。しかしそれらは全て小乗仏教であろう。ご存知のわれら日本の大乘仏教は中国経由のものである。その中国では文化大革命の弾圧により仏教はほぼ消滅していると聞く。しかし熱心に仏塔に五体投地する仏教信者を見て、原点に返ることも必要であると感ずる。大乘であれ、小乗であれ、仏教自体が世界の宗教の巨大化の中にあり埋もれている。キリスト教という宗教は現代科学や経済も丸のみ巨大化しているのが現状であろう。宗教離れとはキリスト教以外の宗教の縮小化のことを指す状態である。さて、仏塔の正面を回ったところに釈迦が悟ったといわれる菩提樹があった。樹の周りには厳重な柵が設けられていた。もともと柵などなかったらしいが、あのオーム真理教の麻原彰晃が無断で座って以来、柵ができて閉ざされてしまったという。で、残念ながら柵の外で座禅をしてその気分を味わった。オーム真理教はもちろん日本仏教とは何の関係もないが同列に見られる日本人としては恥ずかしい気持ちであった。

仏陀、即ちゴータマ・シヤタルータの悟りの過程とは逆になるが、この菩提樹の下

大峯奥駈道(21)

下村 嘉明

で悟る前にはここから、眺めることが出来る前正覚山というやまで六年間苦行したという。そこで悟りを得ることが出来なかったシヤカは麓の川に下りてきて沐浴をした。そこで近くのセーナ村の娘スジャータから乳粥の供養を受けて、この地へ来て悟った。仏陀に大いに貢献した地、今は名前がずばりスジャータ村になっているところへバスで行く。のどかな田園地帯がつづく。ここらは二五〇〇年前とあまり変わっていないという。沐浴したという川を渡る。大きな川だが水はほとんど流れていなくて干し上がっていた。三〇分ほどで赤レンガを積み上げた饅頭型のストーバについた。ここでは知らないインド人がうろうろして寄付をせがんでくる。宗教となんの関係もないので無視する。昼食は相変わらずインドのカレーとナンで済ませて、これから長距離二五〇キロのバス移動である。昔ベナレス、今はワラーナシー、いよいよヒンドゥー教の聖地へ向かう。(前編おわり)

釈迦が岳から弥山を目指し急な道を下り始めた。ロープが張られた道は木々の中にはあるが、滑れば止まらないような斜面であった。私は、疲れているので嫌な感じがした。その時、どこからともなくホラ貝の音が聞こえた。注意して聞く、確かにホラ貝である。

愛宕山の千日参りの時に聞いたホラ貝の音である。峰筋であれば三キロも届くというホラ貝の音が遠くの峰から聞こえてきたのだ。ホラ貝の音で弱気になった気持ちが一気に軽くなって、自分は修験者たちが修行する大峯奥駈道にいるのだ、と誇らしくなった。

ホラ貝の音は、どんどん近づいてくる。私たちも歩いていっているのだが、ホラ貝の音はもの凄く速さで近づいてきた。とうとう一番急な斜面に差し掛かった時に、白装束をまとった一団と出会った。

「さーんげさんげ、ろっこんしようじょう(懺悔懺悔、六根清浄)と唱えながら一目散に登ってきた。狭くて急なところで避けようがない。何とか道の脇にある木につかまりながら彼らと交差する。先達を務める若い僧に私は聞いた。「何人ですか?」と聞くと「四十二人です」と元

気な声が返ってきた。次に来た人には、「どこまで行くんですか?」と聞く「前鬼まで」と。彼らは弥

山から前鬼の宿坊へ行くのである。吉野から山上ヶ岳の宿坊に泊まり、次の日は弥山、そして前鬼。私たちの逆のコースを来ているのだ。

次から次へと登ってくる人に声をかける。励ましながら、いろいろと質問を投げかけた。「最高齢の人はいくつ?」「前鬼から弥山へ行くのと弥山から前鬼へ行くのとどちらがしんどいか?」などなど。

一団を一人一人見ていると、様々な人がいる。七十二歳の人や太った人、ふらふらしている人や余裕しやくしやくな人……。大方は、白装束である。足元も白の地下足袋なのだが、幾人かは、登山靴やスニーカーの人もいた。山伏の装束をすべて買った数十万はするに違いない。初めて参加する人、毎年参加している人とは、見たらわかる。

この一団は、吉野の寺が毎年行っている御一行さまだと思っただ。会費が数万円で申し込みを受け付けて誰でも参加できるはずだ。ただ、体力がないとついていけない。毎日十二時間歩く体力・気力がないと話にならない。

今の私なら多分ついていけそうにはない。参加されている人は、日々訓練を怠らなかつた人たちである。宿泊や食事は用意されているから軽装であるが、十二時間早く歩き続け念仏を唱え続けるのは大変だ。一団も終わりに近づき山伏の正装した人たちが続く、いかにも熟練した身のこなしをして急な崖路を登ってくる。

「さーんげさんげ、ろっこんしようじょう」の念仏の合間に「まかはんにやはらみったしんぎよう……」のお経が聞こえた。いつも母が仏さんの前で暗唱していた般若心経だと気づいた。

「えっ、なんで般若心経なんや?」この疑問が沸き上がった。「さーんげさんげ、ろっこんしようじょう(懺悔懺悔、六根清浄)は深い意味は分からずとも、何となくわかる。峰々を歩きながら身も心も浄化することだろう。

しかし、般若心経は、葬式ではいつも聞いているが、山では似合わないなあと感じたので、後で調べたら、いかに私が無知無学だったかが分かった。数あるお経の中で般若心経ほど知られたお経はない。多くの人が一度は聞いたことのあるお経だと思ふ。

亡くなった母は、毎日仏間に行き般若心経を暗唱していた。五分もかからないから母にとっては、朝の挨拶みたいなものだったのである。そんな母の般若心経に興味を持って解説書を買って読んだが分からず、分からずじまいにしていた般若心経が大峯奥駈でも出会ったのである。もう逃げられない、この般若心経を理解せずして奥駈を歩いたとは言えない。山伏とは、山にひれ伏し山に教えを乞う者だ、私は、山に般若心経の教えを乞うことになった。興味深々な世界の扉を開ける糸口を私はつかんだ。

今回は、前回でヒーローとして登場した源頼光の家臣・平季武が、その仲間とともに、ピエロの役で登場する楽しい話です。教科書に出ない度は一／五。

頼光の家来ども、紫野に物見に出掛ける話し(巻第二八・第二)

今は昔、摂津守・源頼光の家来に、平貞道、平季武、坂田公時という三人の強者がいた。みなそれぞれに男前で勇敢、腕が立ち、判断力にすぐれ、非の打ち所のない武者たちだった。東国でもしばしば手柄をたて、人々に恐れられた強者たちであつたので、摂津の守も彼らを、ねんごろに取り立て身辺近くに使つていた。そんなある日、都の加茂の祭り(葵祭)の明くる日、齋王が紫野にある齋院に帰る行列を見物しようと、この三名が「今日は絶対に見物してやるぞ」と、相談して一計を案じた。曰く「馬を列ねて紫野へ出掛けるのは無粋で見苦しい。まして徒歩で顔を隠して行くも話しにならない。だが絶対見物はしてみたい。どうするのがよかるうか」と嘆いていると、一人が「さて、某の高僧の牛車を借りて、それに乗つて見物に繰り出そうでないか」と提案する。もう一人が「乗り慣れぬ車に乗つて、身分の高い貴族に鉢合わせして、引き下ろされ蹴られ、犬死にしよう

やも知れぬ」。別の一人「では、下簾を下ろして、女車に見せかけるのはどうだろうか」。賛成。いいアイデアだ」と、三人は衆議一決。さつそく高僧の車を借りてきた。下簾を垂れて、この三人、安物の紺の水干袴などを着たまま、それに乗り込んだ。履物なんかは皆、車の中に取り込んで、三人は(女車がする)袖を出して見せることもしないので、高貴な女性のお忍び、という風情になつた。

こうして紫野あたりに車を遣らせていくうちに、三名とも牛車に乗つたのは初めてだったので、何かの容器に物を入れて振つたのと同じように、揺られて揺られて車の壁板に頭を打ち付けたり、お互いに顔と顔をぶついたり、あるいは仰げ様に倒れ、また突つ伏せたりして、転げ回つてとてもガマンできない。こうして進んでいくうち、三人全員が車酔いをしてしまい、車内のそこら中に吐き散らしして、烏帽子も落ちてしまふありさま。

しても、この声は大きくて男の声だ。何から何まで怪しい」
こうして、ようやく紫野に到着して車を止め、そこに固定すると、あまり早く着すぎたので行列を待つうちにこの三人、車酔いで気分がこの上なく悪く、目が回つてすべてが逆転して見える始末。あまりに気分が悪いので、三人共々、尻を持ち上げるようにして寝入ってしまった。そうするうちに、行列が目の前を通過していったが、三人とも死んだように寝込んでしまつて、露知ぬ間に終わつてしまつた。すべてが終了し、どの車も牛を繋ぐ段になつてようやく目が覚めて、びっくりする。

気分が悪く、寝入りこんで肝心の行列を見逃してしまつたので、腹立たしく悔しい。「帰りにまた車を飛ばして騒ぐことになれば、自分たちも生きた心地がしない。千人の軍勢の中に馬を走らせて入つていくのは普段から鍛錬をしているので怖くはない。ただ貧相な牛飼奴に身を任せて、このようにも酷い目に遭わせられるのは、割に合わぬ。この車で帰るとなると、自分の命も危うい。だからしばらくはここを動かずにいて、大路に人が少なくなつてから、歩いて帰ることにしよう」と相談をして、人影がまばらになつたところに、三人、車から降りて車は返させた。その後、そろつて履物をはいて、烏帽子を鼻の元に引き被り、扇を広げて顔を隠しながら、摂津の守の一条の家ま

で引き返した。

季武が後に語るには「剛胆な武将といえども、牛車には負ける。金輪際牛車はこりこり。車の辺りには近づくことも避けておつた」のだと。

というわけで、勇猛で思慮深い者たちではあつたが、牛車に乗つたことがなかった者が、このようにも酷い目にあつて、車酔いで死にそうになつたという、笑い話であつた、と語り伝えられているといふことだ。

《コメント》

前回に英雄として登場した、源頼光の武将・平季武らが、ピエロを演じる笑い話です。このメンバーの一人・坂田公時はむろん大人になつた金太郎さん。

この舞台となる紫野は、京都の大徳寺・船岡山あたりで、源頼光の邸宅は、一条堀川辺りにあつたということですので、距離にしたなら一キロほどになるでしょうか。

ここに登場する牛車の乗り心地が、想像以上に悪そうなのが意外な気がします。道路の悪さと、衝撃吸収の装置がなくクッションもなかったせいでしょう。牛車に乗るにはそれなりのコツが有つたことでしょう。

源頼光と四天王たちが活躍していた十世紀後半から、この物語が書かれた時代までは、百数十年は経過していたと思われまふので、ここに登場する武者たちは

B級サラリーマン渡世譚 (67)

明石 幸次郎

すでに英雄化・伝説化されていたと考えられます。そんな英雄たちが演じる情けない姿には、庶民も親しみを感じたのではないのでしょうか。武勇に優れた英雄たちがピエロを演じる落差が、当時の都の人たちに恰好のうわさ話を提供したのではないかと思われまます。

ただ頼光四天王の筆頭で、羅生門や一条戻橋での鬼退治、大江山での酒呑童子退治、土蜘蛛退治などの逸話で有名な渡辺綱が、ここには入っていないのは、彼の英雄としての名声が確立していて、三枚目の役回りは避けられたのかとも考えられます。今でいえば、さしずめ木村拓哉がコメディを演じないと似ているのかもしれない。

最後に季武の言い訳が語られるのも、おかしみを増しています。



担当者の役割 (その20)

S沢との電話は、基本的には一週間の納期短縮に条件付で協力するとの事であった。S沢の言う条件は、想定内の内容であったので、明石は担当者としての判断で上司に相談して了解を求める事はせず、即答した。

しかし、了解した内容を宇都宮工場の管理課長、工務課長宛に文章で欲しいと要求されたので文章を起草して、A杉課長の捺印を貰わなければ、担当者の明石の判だけでは、いくら優しそうなS沢でも、受け取らないと思つた。

その為には、値上げ交渉のレポートを纏めて、それを説明する時に、同時に工場宛の文章を付属文として、K田部長、A杉課長の了解を取った方が一度で済み、打ち合わせも定時内で片が付く考えた。

四時近くには何とか、交渉の進め方のレポートと工場に出す文章が纏まったので、M居に「レポートが纏まりましたので、良ければ、今からでも上に報告したいのですが、時間を取って頂けませんか?」と問いかけると「おう、出来たか、三部コピーしてくれ。直ぐに、A杉さんと、K田さんに時間を取ってもらおう」と言つて、A杉課長とK田部長に了解を取って戻つて来た。

明石は自分でコピーを取り、その一部をM居に渡したところ「明石、この工場に出す、文章は何や?こんなもん出す必要はな

いのと違うか?」と一読して言われた。

「M居さん、これは、交渉のストーリーに工場側に協力して貰う為には、このペーパーが必要なんです。これがあれば、現場は機嫌よく動いて協力してくれます。工場は営業の口約束だけでは、動きませんよ!無理を頼むのですから、紙一枚で済むことなら、簡単なことと違ひますか!」と反論した。

「まあ、エエわ。俺なら、工務課のHさんに電話で了解取つたら、それで済むわ!こんな紙なんか要らんわ」と言つたので「M居さん、工場で実際に仕事するのは、管理職ではないですよ。動き回り関係者に説得して、やつてくれるのは、担当者なんですよ。その担当者に納得してもらい、今回の様な特別なこちらの無理を頼む場合は、ある程度の担当者の要求は聞いて進めた方が、結果的には、上手くいくと思ひます。これは、S沢さんの要求を聞いて、文章として出さないと、後々、私が仕事をやりずらくなります!」と強く主張すると

「分かった!お前とここで議論してても仕方が無いので、打ち合わせ室でK田さんとA杉さんを交えて話をしよう」と言つて席を立ち、打ち合わせ室の方に歩いて行くとしたので、明石は慌てて書類とノートを持って、M居の後に従つた。

打ち合わせ室に入り、テーブルの上にコピーをした書類を、二人分置いた。

暫くすると、K田部長とA杉課長が笑いながら入つてきて席に着くや「さあ、始めよか」とK田部長がコピーに目を通しながら、明石に説明を促した。

明石は、まず、値上げ交渉の進め方について話をした。「値上げの満額回答は難しいので、先方の値下げ分を加えて、一五パーセントアップからスタートして、最後は一〇パーセントで決着するという内容です。それと一五パーセントアップの根拠は、そこに示してあります。物価指数は、前年比韓国は二一パーセントアップ、日本は約五パーセントです。工場が言っている五パーセント以上は、上げて欲しいと言うのは、賃金上昇と部品価格アップなどで、管理課から見積りが来ているようで、ここにありません。それ以上となると、こちらで理屈を付けなければいけません。私が考え出した理屈として、①重要機能部品の韓国向け旧部品一〇点、メーカーから一五パーセント値上げ、②その他部品一〇パーセント③、納期短縮の伴うコストアップ、④賃金上昇⑤運賃等物流コスト上昇、海上運賃の原油価格上昇に伴うアップ、梱包資材等の値上がりなどで、五項目のトータルで一五パーセントとしました」と説明すると「何や!君が考え出したという事は、工場からの数字ではないのか?」とA杉がぼかした顔をして問いかけた。

「そうですよ!それは、五パーセント以上の値上げをしないと、私を考え出したとぶつきらばうに答えた。

すると「明石、そんなもん、根拠の無い理屈は屁理屈と言つて通らんぞ」と馬鹿にしたようにA杉に言われたので「元々五パーセントアップは認められた価格交渉を私が引き続き、五パーセントでは駄目や、

オクラの山たより (29)

困丁生

美濃国の大垣にかかわった話をもう少し続けます。

日本史をひもとけば、すぐに気づくことですが、日本史にターニングポイントにあたる東西の勢力の戦いはこの大垣周辺で起きています。

最も知られているのは関ヶ原の戦いです。西軍の拠点になった城は大垣城。この城を無視して徳川家康が西に進んだために大垣の西方にある関ヶ原で天下分け目のいくさが戦われました。

他にも古くは七世紀の壬申の乱。関ヶ原付近で近江側の軍勢を打ち破った大海人皇子側は一気に大津京へと進撃していきます。

十二世紀の源平の戦いでは大垣の東部にある墨俣で平重衡に率いられた平氏と源行家と源義円(源義経の同腹の兄)とが戦い、このときは平氏の圧勝でした。

ここで討ち死にした源義円の慰霊碑はいまでも墨俣の地にあります。そして十三世紀の承久の変。これも墨俣付近で後鳥羽上皇側と鎌倉幕府側が戦っています。もちろん、幕府側はあつとという間に上皇側を蹴散らしました。

最後に十四世紀の南北朝の時代。これも関ヶ原あたりの青野ヶ原で京の足利尊氏の討伐をめざす北畠頭家が率いた南

朝側と京を守ろうとする北朝側とが戦いました。戦いは南朝側が勝ったのですが、兵が戦いに疲れ北畠頭家は京への進撃を断念します。

繰り返される西美濃で上洛をめざす東軍とそれを阻止しようとする西軍との戦い。なるほど大垣付近の地域は東西どちらの勢力にとっても戦略的に重要な場所であったことがよく分かります。

そのせいでありましょうか、大垣藩を任されたのは三河以来の譜代大名であり、武功のほまれ高かった戸田家です。その武名のせいでしょうか、島原の乱、近隣の天領でおきた一揆の鎮圧、江戸湾の防衛、京の警護など幕府の要請に従って人的にも経済的にも多くの犠牲をこの藩は払ってきました。

内政面では木曾川、揖斐川、長良川と多くの大河が平行して流れる地域をその領地としているため大洪水もたびたび起こり、その復興対策や治水対策に多大の出費を繰り返し、結果として慢性的な赤字をかかえる藩となりました。

事実、十七世紀末から十八世紀にかけて二回にわたり「永御暇(ながのおい)とま」つまり家臣のリストラ(人員整理)が行われ三百五十人ほどが家禄を失っています。江戸時代、一万石の大名でかかえている家臣の人数はおおよそ百人から最大でも二百人といわれていますから、現代の感覚でいえば従業員数千人ほどの企業が二割弱の従業員をリストラした

ことになります。これは驚くべき数字で、ここからも苦しい台所状況は十分にうかがえるでしょう。

この大垣藩を幕末の時期に事実上その政務を取り仕切ったのは城代家老であった小原鉄心(一八一七〜一八七二)、名は忠寛です。鉄心は、その号で鉄のごとき勤王の心を持っていた人物でした。詩人としてもかなり有名であったようで以前にも紹介した木下彪の「明治詩話」にも八首の詩が載せられており、小原鉄心を彼は次のように紹介しています。

維新の功臣で詩をよくしたものは少なくないが、なかんずく大垣藩の世臣(代々仕えている家臣)小原忠寛、号して鉄心の如きはその尤なる者(非常にすぐれた者)であった。ここまですぐれられると木下彪に絶賛された鉄心の詩を紹介しないわけにはいかないでしょう。ここで紹介するのは藩主の戸田氏正の求めに応じて西欧の侵攻への対策を献上した際に添えた詩の第三首です。我々がなじんでいる漢詩とはちよつと趣が違いますが、当時の雰囲気と尊皇攘夷の志に燃える鉄心の心が見えます。

蕃艦来兮相海浜
即今懐古独空響
仏郎英吉何為者
思殺弘安英断臣

蕃艦来たり相海の浜
即今古をおもひ独り空しく響す
仏郎英吉何するものぞ
思殺す弘安英断の臣を

もつと上げると言われるだけで、その為に何をどう言う理屈で、どうやって交渉するのか、担当者の私が考えろとM居さんから言われただけです。私が考えた理屈が屁理屈で駄目ならば、何か教えて下さい」とA杉の顔を睨んで言うと、K田部長がこつとして笑いながら「まあまあ。明石君なりに色々情報を取ってきて考えた理屈だと思つたので、A杉さん、M居さん、何か明石君が考えた理屈以上の理屈があれば、この席で言つて欲しいのだが、私は、明石君の今までの資料課での経験と知識から理屈を考え出したと思うので、彼が考えたストーリーでエエのでは、ないかなあ〜前任者のM居さんは、どうかね?」と明石の横に座っているM居に問いかけた。

M居は「まあ、エエのでは、ないですか?」ともう自分には関係ないような言い方で答えた。

A杉が「Mちゃん、アンタ、それは、係長としては、無責任やでー何か、明石に参考になるような助言なりを言つてやつてやらないとアカンやないか?」

するとM居は「難しい相手で、自分等の主張しかりないので、一五パーセントの数字を見たら、輸入課の連中は、目を丸くしびつくりして、交渉にならないのと思いますすがー」と答えた。「M居さん、そんな事を言つていたら、明石さんを韓国に出張行かされないやないか!交渉を一日でも早く決着させ、価格を決めてCKD部品を送らないと、このままずっと延びれば、政治問題になったらエライことになるので。」

本来 機変は無為に出ず

ただ能く我が軍心をして一ならしめば
鼓合 金分期にそむかざらん

「至つて正統な兵法のうちにきわめて奇抜な兵法が存在する。元来、臨機応変な策は無為自然から生まれるもの。ただひたすら我が軍の心を一致させできれば、金鼓の音に応じて兵たちが集合離散し我らの期待に背かないであろう。」

これが鉄心の詩に書かれた攘夷の方策なのです。その内容は伝統的な軍学の域を出ず、具体論のまったくない抽象論でかつ「精神一到、何事かならざらん」という精神論であり、歩兵の隊列の組み方（例の鶴翼の陣とか車懸りの陣とかいうもの）の論であつて、強力な大砲によつて敵陣を粉碎して前進していく西欧の軍艦・軍隊にとつても対応できそうもありません。

この鉄心もペリーの艦隊を目の当たりにして今までの考えを捨て高島秋帆流の師範の塾生となつて西欧流の砲術を学んでいます。この切り替えの早さ、頭脳の柔軟さはさすがというべきでしょう。

ただ、幕末の激しい潮流は城代家老という重職にあつた鉄心に学びの時間を許しませんでした。文久三年（一八六三）から元治元年（一八六四）にかけて大垣藩は京都であろうと大垣であろうと、場所に関わりなくその警護と兵の鍛錬に忙殺されたはずで、そして西洋の兵法の必要を痛感した鉄心によつていち早く西

二

洋式の砲術が導入された同藩では砲術の訓練が行われ、それまでのほとんど戦国以来の軍政も急ピッチで改革されたはずで、

そして元治元年七月十八日に起きた禁門の変。大垣藩五百人ほどの兵は鉄心の指揮のもと伏見街道の深草宝塔寺付近で福原越後ひきいる長州勢と戦っています。このとき大垣勢は奇計に拠つて長州勢を退けました。この戦いの様子は「元治夢物語（馬場文英著 原著は慶応年間の刊行 岩波文庫 2008）に次のように書かれています。

（大垣勢は）長州方をば八方より取り囲み、突き伏せ、切り立て、首を取ること、野中で草を刈る如く、河原で石を拾うに似たり。

講談本のような書きぶりですが、盛っている感じがしますが、嘘半分にしても大垣勢の奮闘で福原越後がひきいた長州勢が退却したのは確かです。

そして、戦いが終わつてみれば京都の町は半分近くが焼けて悲惨な状況でした。余、兵後、事をもつて堺町を過ぐ。

夜半、月色、昼の如し。四顧するも寂寥、一つの虫の声だに聞かず。ときに死屍の路に横たはるを見る。惨として言ふべからず。

と当時の記録にはあります。その後、二度の長州征伐にも大垣藩は参加し、そして鳥羽伏見の戦いときを迎えます。

鳥羽伏見の戦いが起きたとき、小原鉄心は王政復古後にできた新政府に召されて参与となつていました。

慶応四年（一八六八）一月三日、幕府軍は兵を率いて京へと向かいます。大垣藩はその先鋒となつていました。指揮していたのは鉄心の子息兵部（小原忠通、当時二六歳）。鉄心はこの情報に触れると驚愕し使者をおくつて「錦旗をかかげる官軍に発砲してはならぬ」と説諭しました。このとき使者となつたのが菱田海鷗（一八三六〜一八九五）です。

菱田海鷗（海鷗は号で、名は文蔵）は大垣藩の藩儒で漢詩人でもありました。海鷗は小原鉄心の愛弟子のような人物であり、子どもの頃から鉄心にかわいがられていたのですが、かなりの放蕩者でありました。二十三歳となつた海鷗が父親を失つたときの様子を鉄心は次のように書いています。

父君が亡くなり、母君だけとなつた。母君の教育は本当に孟母三遷の教えのような周到さがあつたが、海鷗の人材が完成されようとする時、その才気はますますすたけりはやつて、花柳の巷に遊ぶならいが、その頃から始まつた。それは足の速い馬が手綱を解かれたようなもので、その駆け出していく勢いはもはや止めることはできない。

これによると海鷗の放蕩癖は父親の死

「蕃艦」とは「相海の浜」つまり相模湾の海浜という言葉からアメリカの軍艦のことと分かります。「即今」すぐに「古」を思うといつていますが「古」とは後の「弘安」という語からすると元寇の頃のことらしいのです。近代的な蒸気船がやつて来たのに元寇を持ち出してあれこれいうあたりが、この時代の雰囲気というものではないでしょうか。「鬻す」とは顔をしかめること。たいそう悩むということでしょう。続く第三句で「フランスやイギリスがなんぼのもんじや。かかつて来いや。」と強がつてみせるのですが、この詩を作つた時点ではアメリカの軍艦なのかフランス、イギリスの軍艦なのか、しかとした情報は届いていなかったようです。そして「思殺」。つまり、ひたすら思うのは「弘安の役の時に元の使者を斬らせた北条時宗の決断力だ。今こそ元寇の時のように夷狄を打ち払え」と勇ましくいわけてです。「旧式の火繩銃や弓矢で黒船を打ち払え」とは何という時代錯誤なこと」と今なら笑いとばすこともできますが、当時は真剣そのものであつたでしょう。

それで肝腎なこと、すなわち、どのように戦えばよいか、という点に触れたのが次の第五首です。

至正之中存至奇

本来機変出無為

只能使我軍心一

鼓合金分不背期

至正の中に至奇存す

によつて始まつたらしく、二十五歳で江戸に遊學するときにはすでに寵愛する妓女がいたといひます。大垣の遊里では「ぶらんさん」と呼ばれるような有名人にきつとなつていたのでしよう。

この海鷗が江戸に遊學するまでになつたのも鉄心の「しつかりせい」という説教のたまものであつたそうですが、もとはといへば海鷗の放蕩癖は鉄心の責任といへなくありません。というのも鉄心の伝記によれば度量が大きく大酒飲みであつた鉄心は酒を飲む際には妓女を挙げて派手に遊んでとことん楽しんだそうです。早くから鉄心に随従していた海鷗は若年からそういう遊びになれており、それが色町での遊蕩にのめり込む一因にもなつたとか。

とはいへ海鷗の名譽のために一言しておくと江戸では安積良齋の塾に入り群を抜いた才気を示したとか。江戸遊學中、彼の放蕩癖はやや鳴りを潜めていたようです。

こうした鉄心と海鷗の間柄であつてみれば、大垣藩危急存亡の時に「官軍とは絶対に戦うな」と伝えよ。もし息子の兵部が聴かなかつたら児の頭を斬れ。朝廷への大義は背いてはならない。」という鉄心の意志を伝える使者の責を海鷗に託したのは理解できます。

すでに伏見の町のあちこちで打ち合いや斬り合いが始まつている頃、海鷗は使者として大垣藩の本陣に向かいます。し

かし、その途中で長州勢の兵たちに捕えられてしまいます。

先ほど述べたように先年の禁門の変で伏見街道稻荷大社のあたりで大垣藩兵が長州の兵をさんざんに破っています。そのことを長州勢の兵たちは根に持つており「大垣藩の者は斬るべし」と殺気だつていました。

この時代には捕虜を虐殺してはいけないなどというルールはなく、海鷗の生命は正に風前の灯火という状態であつたのです。事実、海鷗が捕縛されて引き据えられた場所ではすでに何人かの捕虜が斬られ、あたりには血のおいが漂つていました。

この場に臨んでも海鷗は慌てず騒がず「紙と筆をいただきたい」といい、渡された紙にスラスラと書いた詩が大垣公園で碑として建てられている「屠腹の詩」です。海鷗の命を救つた詩ですので、紹介いたしましょう。詩の後に口語訳をつけます。

苦学欲酬君父恩

一灯空伴卅余年

従容就死是今夕

只恨丹心未徹天

苦学むくいんと欲す君父の恩

一灯空しく伴ふ卅余年

従容として死に就くはこれ今夕

ただ恨む丹心いまだ天にとおらざるを

主君や父母の恩に報いようと思つて熱心に学んできた。このままでは三十年余も灯火のもとで学んできたことも空し

くなつてしまふ。平然と死んでみせるのは、まさしく今夜なのだ、ただ残念なのは、この私の真心がまだ天子様に届いていないことなのだ。

この詩を読んだ長州藩伏見陣營の責任者石部誠中（後に岡山権令となる）は、大いに感心して、まわりの者と相談し、長州藩士をなだめて海鷗の命を助けました。一片の紙切れに書いた数行の文字が命を救うこととなつたのです。

海鷗の「屠腹の詩」は内容的には人波すぐれたところがあるとも思えない当時としては平凡な作品ですが、石部某はたぶん詩の内容よりも土壇場といえる場において漢詩のルール（押韻やら平仄やらの小難しい規則）にのっとりた詩を苦もなく書き上げたことに驚嘆し助命したのでしょうか。

海鷗が一躍スターとなつてスポットライトを浴びた一瞬でした。

三

一度は官軍に向かつて発砲し賊軍となつた大垣藩でしたが、鉄心の必死の主張もあつて佐幕派であつた藩論を勤皇派へと一朝で翻しました。官軍が江戸をめざして中山道を進んでいったとき大垣藩はその先頭にいたのです。

明治の世となつても小原鉄心は新政府の参与として経済的な面での施策をいろいろと模索していきました。同僚は越前藩の三岡八郎（由利公正）。彼は前越前藩

主松平春嶽の懐刀であり、あの坂本龍馬が新しい世の財政はどうあるべきかを聞きに行った相手でもあるのです。

漢学・儒学の教養にあふれた鉄心と合理主義的な政治家であつた由利公正とはそりが合うわけありません。

たとえば、禁門の変で荒廢した京都の復興策で鉄心は「庶民が困窮しているときに官に在る者が豪華な邸宅を建てるなどまかりならん」と厳しい儉約を指示すれば、由利公正は「今こそ官は豪華な家を建てよ。人足には遠慮せず酒をふるまえ。人が見ていたら盛大にやれ。」と指示します。今風に言えば緊縮財政推進と反緊縮財政推進の対立というべきでしょう。結果はどうなつたかというところ、反緊縮財政推進派の勝ち。由利公正の言によれば「私がそういうことをすると京の町の人々は土蔵の鍵を開けて金を持ち出し、家を建てる者が京の町にそろそろつと出てきた。まず人情というものはこういつたものさ。」不景気なときには反緊縮財政こそが経済を回復させていくとはイギリスの経済学者ケインズの考えですが、由利公正の発想はそれに近いといえるかもしれません。たぶん彼は経験的にその有効性を知つていたのでしよう。

結局、この由利公正と意見が合うことはなく小原鉄心は明治元年のうちに官を辞して大垣に帰りました。

その五年後、明治五年四月に病を得て亡くなりました。

さて、かわつて菱田海鷗です。彼は明治元年三月二日に「総裁局史官」を仰せつけられています。長州の兵に捕えられて三ヶ月ほどしかたつていません。たぶん参与であつた小原鉄心の推薦によるものであつたでしょうが、その待遇がビツクリするほど良いのです。本人の手紙から確認してみましよう。

一ヶ月の給金二百両、一年しめて二千四百両下し置かれ候ふ。……中略……もう日々鯛の吸い物に、夜は三味線でくらし候ふても、二、三年には千両持つて退職でき申すべく候ふ。御一笑くださるべく候ふ。

海鷗が有頂天になつてゐる顔が目につかびそうな文ですが、月給二百両とは豪勢です。一両は米一石、つまり米一五〇キログラムの値段ですから、現在の五、六万円くらいになりましようか。そうすると月収一千万円以上となります。ただ、残念ながら幕末はかなり米価が高騰しており、一両はせいぜい四千円ほどだつたと専門家はいつています。それでも年収は一千万円前後となつたはず。資金も潤沢、あの鉄心も京にはいないとなれば、海鷗のうちにはかつての放蕩児の心がフツフツとよみがえつてきます。しかも海鷗が住んでいたのは紅灯の巷といえる鴨川近辺となれば休日たびに遊興へと向かうのは当然のことでした。こうしたとき生まれたのが次の「鴨東竹枝」と題

した詩です。詩の後に口語訳をつけます。

五日参朝一日閑

蓬頭粗服跨洋鞍

春風不使英雄老

花満鴨東十二欄

五日参朝一日閑なり

蓬頭粗服 洋鞍にまたがる

春風 英雄をして老いしめず

花は満つ 鴨東の十二欄

五日間、朝廷に勤務すると、一日は休みとなる。髪も整えず粗末な私服で、西洋風の鞍にまたがって出かける。春風に吹かれると、私の内の英雄の気がよみがえつてきて、鴨川の東べりの、たぐさんの欄干に花が満ちている妓楼に登つていくのだ。

この詩を作つたのは明治元年のこと。大垣藩の兵たちは関東や東北でまだ旧幕府軍と戦いを続けていたころです。まったくいい気なものです。官僚が花柳の巷でとんでもない遊びをするのは、あの「ノーパンしゃぶしゃぶ事件」(一九九八年に大蔵省の官僚が起こした不祥事)を知る我々には何の驚きも起きないでしょう。

これはまったくの余談ですが、当時、「ノーパンしゃぶしゃぶ」の前身であるといわれた「ノーパン喫茶」で有名であったのは大阪にあった「あべのスキヤンダル」では「ノーパン喫茶」は大阪発祥かといえ、さにあらず。かつて一九八〇年前後に京都の西賀茂に「ジャーニー」

という喫茶店があつたのを筆者と同じ年代の人は聞いたことがあるはず。「パンスト喫茶」として有名であつたこの店が「ノーパン喫茶」の一号店であつたと井上章一氏は彼の著作の中でいつています。「だまされたつもりで見に行けとけしかけられ、その実在を自分の目でたしかめた、と井上氏が言っているのです。その存在は間違いないところでしょう。官僚を墮落させる仕掛けは東京、大阪だけにあるわけではなかつたのです。放蕩癖のある海鷗がメロメロな状態になつたのも光と闇を合わせ持つ京都の奥深さにあつたのでしよう。

いくら遊びが過ぎるといっても、海鷗が

それで免職になることもなく、文筆の才が認められて侍詔局の高官となり詔勅などを起草することになります。その後、青森県の知事、文部省の書記官などを歴任して明治十八年三月に退職しています。以後官途につくことはありませんでした。

大酒飲みがその一因だという説があります。有名な話では青森県知事の時代に大いに酔つ払つて宴席の真ん中にストップポンの裸で飛び出して踊りまくつた事が伝えられています。大酒を食らつて酔えば傍若無人、天真爛漫な少年に化したようです。この放蕩ぶりも退職後はなりを潜めたようで官を辞した後の「トンデモ話」はほとんどありません。どこか鬱屈したものが酔いで暴発する。そんな印象を筆者は持ちますが、どうでしょうか。

さて、退職後に海鷗は一年ほど郷里の大垣に帰っていました。翌年、東京に向かいました。東京での生活は貧窮を極めます。住まいは陋巷にあり、わずかに近所の子どもを教えてやと糊口をしのごうという状態でありました。しかし、「詩人の不幸は詩の幸」というとおり、こうした境遇から生まれた詩の方が維新前の詩よりも筆者には好ましく思えるのです。力み返つた感じもなく、我を忘れた放蕩ぶりもなく、そして、人間くささもあり、どこか解放感にあふれていて、そこはかとなく漂うユーモアに筆者は引かれてしまふのです。

東京での窮迫した時代の自画像を海鷗はある詩の序で次のように語っています。我が骨は近日きわめて瘦せて、ほとんど人間の世のものにあらず。或る人は目して詩鬼という。

この言葉に見る限り貧にへこたれることなく、いや、むしろ貧を詩になして楽しんでるかのようです。この窮乏したともいえる境遇から生まれた多くの詩には並の詩にはない面白さや輝きがあります。

自らの貧を楽しむかのように、老蒼していく自己をいとおしむように、家族を慈しむ心を隠すことなく平易な語で書かれた彼の詩は詩人の老成、成熟といつていいのでしょうか。

そんな詩をいくつか紹介します。維新

前後の詩と比べてみて下さい。詩の後に口語訳をつけます。

戯為

曾信作文三上方

枕頭固可馬無妨

山妻不識歐家訣

笑問君何在廁長

戯為（たはむれにつくる）

かつて作文三上の方を信ず

枕頭はもとよりよし 馬も妨げなし

山妻は識らず 歐家の訣を

笑って問ふ 君は何ぞ廁にあること長きと

「わしは以前から詩を作るには『三上、

つまり枕の上、驢馬の上、廁の上がよい』

と聞きなるほどと思つてきた。枕の上や

ロバの上で詩を考えるのも悪くはない。

ところが妻は宋代の詩文の大家である歐

陽脩の作詩の秘訣なんかは知らない。笑

つてわしに『あなた、どうしてあなたは

トイレが長いんですか』と尋ねるのだ。」

私の知人の研究者はトイレとベッドの

枕元に必ずメモ用紙を置いていたそう

です。いわゆる非凡なヒラメキというもの

はそういう所で起きるといふのは今も昔

もかわらないことなのでしょう。ただ

し、知人にいわせると「夢の中でハツと

思つて急いでメモを書いて寝ぼけ眼で

書いたせいか、起きた後に見てもよく分

からないことが多い」とか。これでいく

とトイレでのメモが最も役に立つのかも

しれません。

それはともかく、「戯為」はこれが詩だ

ろうかと思えるほどの内容ですが、「これが詩鬼の詩なのさ」と笑っている海鷗の顔が目につかぶようです。

甲午自題五癖処壁

雪師曾所命

五癖果如何

詩酒貧眠病

就中貧癖多

甲午自ら五癖処の壁に題す

雪師のかつて命ずるところなり

五癖とははたしていかん

詩と酒と貧と眠と病なり

なかんずく貧の癖多し

この住居の名は雪爪禪師がつけてくれ

たもの。その五癖とは何であろう。そ

うだ。詩と酒と貧と眠と病であった。た

かに自分の癖であるが、中でも貧乏の癖

が最も多いなあ。

鴻雪爪禪師は大垣で海鷗も小原鉄心も

師事して禅僧です。多くの人と交友し木

戸孝允や大久保利通とも付き合ひのあつ

た人でした。この詩が書かれたのは海鷗

五十九歳で彼の死の前年、明治二十七年

です。これはもう好き放題に書いている

詩です。宮仕えのうつつとしさや堅苦し

い理屈なんかはなんのその。ストレスが

全部なくなつて見えるように見えるのが筆

者にはうらやましい。

女鶴子静子等携孫三人至喜賦

顚骨稜稜経病高

瘦頤不復剪霜毛

嬌孫逼膝求香果

驚見吾顔畏却逃

むすめ鶴子、静子ら孫三人を携えて至る。

喜んで賦す。

顚骨は稜々として病を経て高し

瘦せたる頤はまた霜毛を剪らず

嬌孫膝に逼りて香果を求め

吾が顔を驚き見て畏却して逃ぐる

病み上がりで顚骨はとんがって高くな

る。おまけにやせこけた頬の白毛。刺つ

たことがないのでポウポウだ。かわいい

孫がわしの膝までやって来た。うまそう

なミカンがほしらしい。それが、まあ、

わしの顔を見るとビククリして逃げて

いつてしもうた。

顚骨は「ほお骨」のこと。後は注解な

どはいらないでしょう。ハイハイを始め

たばかり赤ちゃん、片言をしゃべりだし

た赤ちゃんは本当にかわいいものです。

かわいい孫を前にして相好を崩した海鷗

が見えるようです。

菱田海鷗が亡くなったのは明治二十八

年三月のこと。最後は大垣に帰りたいと

いう願いがあつたらしいのですが、東京

で死を迎えました。その後裔は今も長野

市に居住しておられます。

六

幕末維新にあつて大垣に関わりのあつた二人をさつと表面的にですが紹介してきました。たぶん、大垣に何の縁もない人にとつては退屈きまりない話であつたでしょう。

しかし、筆者にとつて大垣は親族の住

んでいた街であり、その親族から何度も

「大垣藩の士族はプライドが高い」と聞

かされてきました。そのため、「大垣の人

とはどのような人たちか」と長らく気になつて

いた土地でありました。それをいかばかりか

晴らすため、今回、少しばかり読者の退屈も顧みず記した次第。

思えば幕末の禁門の変から鳥羽伏見の

戦い、そして会津での戦いとほとんど常

に先頭になつて戦い続けた大垣藩の武士

は「武勇の誉れ高き武士たち」といつて

もよいでしょう。彼らの「プライドが高

い」のも宜なるかなです。本当によく戦

つたものです。

最後になりましたが、実は今回もう一

人大垣に関わる人で紹介したい人がいま

した。

名前は市村鉄之助（一八五四～一八七

三）。ひよつとしたら新撰組、中でも土方

歳三のファンなら、この名前を御存知の方

がいるかもしれません。あのイケメン

の土方歳三の肖像写真と彼の遺品を落城

間近の五稜郭から土方歳三の故郷に二ヶ

月もかかつて運んできたのが、この市村

鉄之介です。彼は慶応三年（一八六七）、

満十三歳で兄とともに新撰組に入隊し、

土方の従者となつて鳥羽伏見、会津、五

稜郭と戦い続けました。わずかに十五歳

少年が土方の遺品をいかにして北海道か

ら関東まで二ヶ月を要して運んで来たの

か。当時の東北地方といえは官軍勢力が

ウヨウヨしていた頃です。その中をどう

やって切り抜けてきたのか。気にはなりませんが、手元に資料もなく紙数もつきましたので、今回はこれまでとあきらめるしかありません。

なお、市村鉄之助については浅田次郎の小説「一刀斎夢録」という作品では話の展開のキーポイントとなる人物として描かれています。興味を持たれた方はぜひ御一読ください。

我がおくのほそ道の旅 (23)

成瀬 和之

平泉

この章は、中学校の国語教科書で学んだ人も多いでしょう。しかし、大人になつて読むと「読む」深さが違つてくると思います。

この箇所は、前段と後段に分けられませんが、前段部分も「声に出して読みたい文学作品」に是非とも加えたいところです。

《前段》

《現代語訳》

奥州藤原氏が、清衡・基衡・秀衡と三代にわたつて築いた栄華も、ひと眠りする間の夢のように、はかなく消えた。当時の平泉の表門跡は約四キロも手前にある。それほどに平泉は広大な都市であった。秀衡の館（伽羅の御所）の跡は、今や田野に変わり、彼の築いた金鶏山だけが昔の姿を残している。

まず、高館（衣川の館）に登ると、北上川が眼下に見える。それは南部（南部藩領、森岡中心）地方から流れ出てくる大河である。衣川は、和泉城（秀衡の三男で義経を守つた忠衡の居城）のもとを巡つて流れ、この高館の下で北上川に合流している。

泰衡（秀衡の次男）たち藤原一族の屋敷跡は、衣が関を間にした向こう側にあるが、南部地方との出入口を警備し、先住民（蝦夷）の侵入を防いだようだ。

それにしても、大儀に殉ずる武士の一党が、この高館に立てこもり、主君義経を死守したのだが、その武功も一時のこと、今や戦場の跡は草むらと化している。

杜甫の詩にある「国は滅んでも山河は昔のまま、城は荒れ果てても、春になれば草は緑となる」という句のとおりだと、笠を敷いて腰を下ろし、時のたつのも忘れ、悲劇を回顧しながら涙にくれた。

俳句「夏草や兵どもが夢の跡」

今、夏草深く生い茂るこの高館は、昔、

武士たちが雄々しくもはかない栄光を夢見た戦場の跡である。

※曾良の句は略

《原文》

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落としはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな 曾良

《解説》

平泉は、これまで折につけ追懐されてきた、義経主従の悲劇の大舞台です。し

かも、奥州藤原三代が栄枯盛衰を演じた舞台でもあります。二つの悲劇は無縁どころか、深い因縁によつて結ばれています。

思えば、芭蕉のみちのくの旅の目的は、この大悲劇の死者の霊を慰めることであつたとも言えます。『おくのほそ道』の旅は、今最大の目的地に到達し、芭蕉はここで鎮魂の一章を執筆することになったのです。

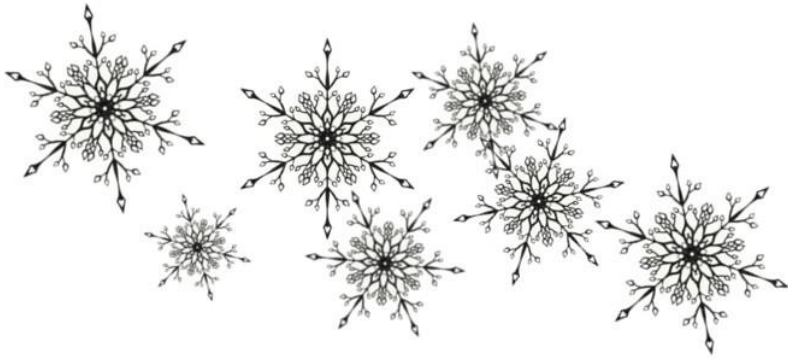
《後段》

《現代語訳》

さて、以前から、その豪華絢爛のうわさを聞いて驚いていた中尊寺の二堂、経堂と光堂が公開されていた。経堂には、藤原三代の將軍の像が安置されており、光堂には彼ら三代の棺を納め、さらに、阿弥陀如来・勢至菩薩・観世音菩薩の三尊の仏像が安置してある。

堂内の内装に使用された七宝も今は散り失せ、珠玉を散りばめた扉も風のために傷み、金箔を押した柱も長年の霜雪で破損して、堂が崩壊し廢墟となり、むなし草むらとなるはずだった。そんな堂の四方を新しく囲い、屋根に瓦を葺いて鞘堂を造り、風雨から守るようにした。おかげで、いつかは朽ち果てるだろうが、しばしの間このように、千年の歴史をしのぶ記念物として保存されることになったのだ。（現在の鞘堂は、新しいもので、場所も移動している）

俳句「五月雨の降り残してや光堂」
すべてを朽ちさせるように、毎年降り



続ける五月雨も、この光堂だけは遠慮して降り残したのだろうか。長い歴史を伝えるように、光堂は今なお燦然と輝いている。

〈原文〉

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽廃空虚の叢となるべきを、四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

〈解説〉

藤原三代の棺を納めた光堂が、草むらと化することなく、燦然と輝いています。この「光」が、藤原三代を慰霊する詩の言葉のようです。また、五月雨は、現在目前に降っているのではなく、五百年の風月を五月雨で代表させたのです。「二堂」「三将」「三代」「七宝」「四面」「千歳」「五月雨」など、数字を連発して文章を引き締めたのも、単なる実景描写を超えて、平泉の悲劇を荘重に申うためです。(角川ソフィア文庫 ビギナーズ・クラシックス日本の古典 松尾芭蕉『おくのほそ道』参照)

前段の「悲劇」と、後段の「光」が対照的です。両方を合わせて考えると、「悲劇を乗り越えて、光をめざして進め!」ということになるのではないでしょう

か?

芭蕉と曾良は、藤原氏や義経をしのびながらも、同時に「応仁の乱」から一三〇年も続いた戦乱によって滅亡した古い日本をしのんでいるということ。義経は古い日本を代表する英雄です。このくだりは藤原氏や義経への鎮魂であるとともに古い日本への鎮魂でもあるのです。

※「応仁の乱」二四六七〜一四七七年。

京都全域が壊滅的な被害を受けて荒廃した。戦国時代まで「戦争の時代」が継続したと考えられる。(ウイキペディア参照)

「応仁の乱」が巻き起こした戦禍の中から新しい日本が生まれたのです。関ヶ原の合戦を最後に長い戦乱の時代が終わった時、焼け野原に立たされた江戸時代の文学者たちを襲ったのは圧倒的な喪失感だったはず。アジア・太平洋戦争に打ちひしがれた日本人の喪失感、さらには大震災の経験をした日本人の喪失感と似ているように私には思えます。(この項、「二〇〇分de名著 松尾芭蕉 おくのほそ道 長谷川權」参照)

《おわりに》

「平泉」の章を書き終えて、私はアジア・太平洋戦争後に歌われていて先輩たちとよく歌った「心の歌」の歌詞をふと思い出しました。その、一番、二番、五番、六番を引用します。

ふるさとの山を見よ

もみじ色はえて

故郷の川面は映す清きその陰(一番)

戦に荒れ果てるも
緑たまもえむ

親なき子たちも今は若者となる(二番)

ふるさとの山守れ

みどりよ若者よ

流れを濁すなむすめ若草(五番)

自由の陽に輝け

故郷の土よ

響け平和を愛す心の歌(六番)

「心の歌」は「青い山脈」とともに、アジア・太平洋戦争後の「光」を感じさせる歌でした。

私には「戦争から平和へ」という流れが、日本国憲法の「改正」がとえられる今日、再び「危険」にさらされているように感じます。私たちは、もつと歴史から学ぶべきだと思います。そして、過去の歴史を振り返り、「心の歌」を忘れてはならないと。

「松島」の章が詩歌の伝統に結びついた風景美と詩心の高揚をつづっているのに対して、「平泉」の章は、「戦争から平和へ」をテーマとし「光」で終わっています。「おくのほそ道」の冒頭文の「人生は旅」という思想とともに、芭蕉の思想・哲学が最も強く現れているのがこの章ではないでしょうか。「我がおくのほそ道の旅」を閉じるにふさわしい章だと思えます。

この「平泉」の章をもって、立石寺から始まった「我がおくのほそ道の旅」の「完結」とします。次回は、「我がおくのほそ道」1から23の「総まとめ」の章となります。

隠された歴史(4)

満田 正賢

一・古代日本の地方名称について

公式に認められている日本最初の地方行政制度は七〇一年の大宝律令で施行された「国郡里制」ですが、その前にも日本の各地方は県とか国などの名称で呼ばれていました。又文献には出てきませんが、評という制度があったことが各地で発掘された木簡などで確認されており、この「評制」が大化の改新(六四五年)で発令された地方行政制度ではないかというのが通説になっています。今回は国郡里制以前の隠された地域行政制度に触れてみます。なお、今回は私が入会している古田史学の会の代表的見方と私の見方との違いも含めて説明したいと思います。

二・県風土記と県制について

初めて日本の各地方の歴史を集めた書物は「風土記」ですが、現在逸文も含めて残っている「風土記」には地方の名称を「郡」と呼んでいるものと「県」と呼んでいるものがあります。地方の名称を「県」と呼んでいるいわゆる「県風土記」は「万葉集註釈」や「釈日本紀」を通して存在が確認されており、「筑前」「肥前」「肥後」という九州地方の記述にのみ残っています。又「筑紫風土記」なる一書があったという記述もあります。「郡風土記」は和銅六年(七一三年)の風土記

撰進の詔(続日本紀)によって撰集が開
始され、延長三年(九二五年)の風土記
勘進の符(類聚符宣抄)によって完成し
ました。古田武彦氏は、「県風土記」はそ
れ以前に九州王朝によって撰集されたも
のであり、その形跡は日本書紀の履中四
年の「始めて諸国に国史を置いた。言事」
を記し四方の志を送りとどけた」とい
う記事にあると考えています。古田氏によ
れば、この記事は九州王朝の史書(日本
旧記)から借用されたものであり、この
履中四年の干支に注目し磐井の墓の破壊
記事などから推定すると「県風土記」の
成立年は五八三年と考えられるとしてい
ます。

「県」という地方の呼び名は景行紀以
前の日本書紀において近畿八か所、九州
九か所に現れます。「九州に集中的に現れ
ることからこの記述が九州王朝の史書
「日本旧記」からの盗用であり「県」は
九州王朝の行政単位であると考えられる。
そして九州にだけ「郡風土記」と「県風
土記」が存在していることから「県風土
記」は九州王朝の風土記であると考えら
れる」と古田氏は考察しています。

三. 「郡評論争」について

「郡評論争」とは、戦後の古代史学の中
で井上光貞氏の提起が発端になり、多く
の学者が論戦に加わった論争です。論争
のポイントを古田氏は以下にまとめてい
ます。

①戦前、津田左右吉氏が大化改新詔に対

してその信憑性を疑い、そこには種々後
代(天智代等)の手が加わっていると主
張した。

②これに対し、井上光貞氏が津田氏の論
点を一つ一つ批判し、結局大化改新詔の
信憑性は保証される、とした。

③井上氏の論説を、坂本太郎氏が再批判
した。坂本氏の論点は以下である。

大化改新以降の詔勅は、すべて「郡」
という行政単位で記載されている。しか
し、実際は、金石文その他確かな資料に
よる限り、当時の行政単位は「郡」では
なく「評」であったことが確認される。
したがって、「大化改新詔」などは原詔通
りではなく、後代(おそらく大宝律令)
の立場からする改変が加えられている。
よって、そのまま確実な資料として使用
するのは危険である。

④多くの学者が加わったこの論争は、昭
和四二年頃の藤原京の木簡出土等で「文
武四年(七〇〇年)以前はすべて「評」
が使われていることが判明し、終止符を
打ったとされる。

古田氏は、そこから「なぜ日本書紀は
「評」を「郡」に変えたのか」という新
しい問いが始まると考えます。そして「評
制」の存在の隠蔽はその制度を産出した
公権力の存在そのものを隠すことである
とし、「評」は九州(筑紫)王朝の制度で
あったという考察に進んでいます。

四. 「県制」と「評制」に関する古田氏の
論に対する疑問

前の「県制」に関する考察と「評制」
に関する考察は別のところで論じられて
います。古田氏は「県風土記」の存在か
ら「県制」を九州王朝が作った制度であ
ると論じながら、別のところでは「評」
が七〇一年に九州年号の終了とともに突
然「郡」に変えられていることから、「評
制」は九州王朝の制度であったと論じて
います。ということは九州王朝が「県制」
も「評制」も作ったということになりま
す。「評制」の「立評」は常陸風土記にあ
る孝徳期癸丑六五三年の「石城評」の記
述や伊福部系図の大化二年(六四六年)
に初めて水依評が設置されたという記述
からいわゆる「大化の改新」六四五年の
年とされています。「評制」の立評は時期
的には「県風土記」成立後のことであり、
時系列的な矛盾はありません。しかし九
州王朝はなぜ自ら「県制」を「評制」に
変えたのでしょうか。

古田氏は「県制」が九州王朝の地方行
政組織であるという推論の根拠の一つと
して、九州王朝は三世紀以降中国との交
流を行っており、又倭の五王時代には中
国の天子の配下の倭王として中国式の
「国—県」制を襲用した可能性が極めて
高いことを挙げています。近畿王朝が律
令制度の模範とした唐の地方制度も「州
—県」制です。近畿王朝においても「県
制」が変更されなければならない理由は
ありませんが、九州王朝においてはなほ
さら中国の制度に無い「評制」を導入し

なければならなかった理由が見当たりま
せん。

五. 「評制」の成立経緯について

ネットで「評制」を検索するとウィキ
ペディアでは「評」とは、古代朝鮮お
よび古代日本での行政区画の単位」と説
明しています。その根拠は以下です。

①朝鮮半島において「評」という行政区
域があったことが、中国史書に記載され
ている。

・高句麗「内評」「外評」(北史・隋書)

・新羅「琢評」(梁書)

②日本書紀の継体二四年(五三〇年)条
に任那に背評という地名の記述がある。
古代朝鮮語および古代日本語に共通した
「コホリ」という言葉があったというこ
とは通説になっています。金思燁氏は

「コホリ」は「邑・村」などを表す語で
あるが、朝鮮語でも「コオル」で同語
と解説しています。(『記紀萬葉の朝鮮語
明石書店』)

米澤康氏は「コホリの史的性格—日本
古代の神話と歴史(吉川弘文館) 収録」
の中で以下の指摘をしています。

①日本書紀の中で大化前代にある郡名
の記述が朝鮮系渡来者についての所伝に
多く見えており、コホリの分布が朝鮮系
古瓦のそれと相通する。

②大化頃に至っては、本来族制的な性格
をもつコホリとミヤケという大和王権の
国内支配の方式との間に何らかの関係が
見られるに至った。

③屯倉という皇室直轄地に戸籍が作られたことはすでに指摘されているが、改めて留意したいのは、郡名とともに蘇我氏という注目すべき豪族の名が見られることである。

④規定された郡（以下仮にこれを制定郡としておく）は、クニ・アガタ・コホリが改編されたものといえるわけであるが、在り方としては、コホリの全国化という見地からすれば、制定郡に改編の類似的単位はクニ・アガタよりも、むしろコホリにあつたと解される。・・・郡という中国・朝鮮を通じ一貫して地域を表している文字に、本質的に異なるコホリという訓が通じて見られるということは、郡のコホリ的理解が、日本書紀編者にあつたと考えないわけにはいかない。

六：「評」から「郡」への変更について
今までの考察を以下にまとめます。

①九州王朝には県（アガタ）という地方行政制度があつた。

②九州王朝には中国の制度を襲用した「県制」を「評制」に変える理由が無い。

③評は朝鮮半島にあつた邑・村の呼び名で有り、日本においては渡来人が自らの支配地の呼称として使用し始めたのが最初である。

④本来族制的な性格をもつコホリ（評）が制度としての「評制」に改編された。

七：評制は蘇我氏が作った地方行政制度である

しかし、なぜ天下立評の詔に関する記述が日本書紀にないのでしょか。それは日本書紀成立時の近畿王朝には都合が悪い出来事だったからです。では都合の悪い出来事とは何でしょうか。それは必ずしも古田氏が論じているように九州王朝の制度であつた必要はないと私は考えています。「大化の改新」とされる六四五年の乙巳の変の直前まで近畿王朝の権力を握っていたのは蘇我入鹿（蘇我宗本家）でした。大化以前にコホリと関係の深い蘇我氏が地方行政制度を新たに施行し、その統一呼称にコホリ（評）という言葉を用いたと考えることは可能です。

では七〇一年に「評」の漢字表記を、中国においては地方行政制度の呼称として使われていない「郡」という漢字表記に変える必要があつたのはなぜでしょうか。それは「コホリ」という呼称とその実態を変えないで、新しい支配体制の新しい制度として被支配者に認識させる為であつたと考えられます。「評」の漢字表記は本来ならば唐の制度に倣つて「県」に変えたかつたでしょう。しかしそれは不可能でした。なぜならば、「県」にはすでに「アガタ」という訓が定着していたからです。

「評制」には古田氏が論じたような九州王朝の影は見えません。それでは、ここでいう新しい支配体制とは何でしょうか。それは、藤原不比等を中心とする「大宝律令」の作成グループによる新しい官僚

支配体制です。そして古い支配体制とは何でしょうか。それは蘇我氏（蘇我倉山田石川麻呂の系統）を含んだ有力豪族グループによる合議体制です。要するに九州王朝を持ち出さなくても大宝律令の制定と同じ年であることを考えれば七〇一年の「評」から「郡」への変更は説明がつくと私は考えます。

八：古田史学が必要とされる新しい視点
・評制が近畿王朝内で施行された制度であるとする古田史学が唱える九州王朝説には新しい視点が必要になります。すなわち「天下立評」の行われた六四五年以前の蘇我氏の権力掌握時に、近畿王朝内の制度とともに九州王朝の制度である「県制」の廃止も目論まれたということになります。注目すべきは、それが旧唐書に記された倭国の最後の訪問記事（貞観二年・六四八年）の少し前の出来事で有り、白村江の戦い（六六三年）のほぼ二十年前であるということです。

・この時期に近畿王朝（蘇我執権）が全国的な地方行政制度を施行したということとは、すでに近畿王朝（蘇我執権）による実質的な全国支配が始まっていたことを裏付けるものであると考えます。

・古田史学は、「記紀に記された日本の歴史は近畿天皇家による一元的支配という虚構を作り上げるために、各種の潤色、改竄、創作が加えられた虚構の歴史である。」と見做しています。その主張には私も全面的に賛同しています。しかし、古

田史学の現在の代表的見方では、「記紀が隠そうとしたものは九州王朝の存在であつた。」として、九州王朝以外にも記紀が隠そうとした史実が存在したという視点では研究が十分になされていないように私は感じています。

・しかし、「九州王朝の歴史以外にも記紀が隠そうとした歴史がある。例えば蘇我執権時代の近畿王朝内部の歴史も併せて隠されていたのではないか。」という私の主張についても古田史学の会の例会や研究会で取り上げてくれています。私は今後も古田史学の会の仲間の歴史の真実を探ろうとする真摯な姿勢から発せられる各種の批判やアドバイスを受け止めながら歴史の真実を探りたいと思っています。



見えない人 (4)

古城 悠

◆◆世界の調整係◆◆

店を飛び出した後、どこをどう歩いたのか記憶には残っていない。この世のものでないみたいな顔で彷徨っていたのだろう。もともと、他人から見咎められることはないのだから顔つきを気にしても始まらないのだが。それにしても「この世のものでないみたいな」と言うのと陳腐な比喻になってしまうが、いまこの世界には自分の居場所がない、居てはいけない、そんな感覚だったのだから比喻ではない、もっと直接的な物言いなのである。会社に戻るとか家に帰るとかの発想が微塵も浮かばなかったのも、どこそこに帰属しているという感覚が霧消しているからだ。

足が向くままに駅前にある高層ショッピングセンターに入り、三十四階のレストランフロアに昇った。無料の展望スペースがあり外回り時の道草で立ち寄ることもあった。姿が見えないのだから、より高層の有料ゾーンに入ることもできたが、金銭的な損得などどうでもよくなっている。映画館であれ、ライブ会場であれ、その気になれば自由に入ることができたが、そういう行動に対する食指はまるで動かない。普通に姿形が保たれていて相応の対価が必要になるからこそ、そ

れが何ごとであれ人をして行動を起こさせる。そして、そうした制約から解放されてどこでも出入り自由になると、あらゆる意味づけが失われる。いまの要は、いずれに対しても帰属意識が持てず、いづれの行動にも動機が見いだせない、一切合切が他人事となっているのである。

以前の世界にいた時は、この展望スペースで夕暮れから夜への移り替わりを眺めるのが好きだった。ここかしこで街の明かりが灯り始めたかと思うと、辺りの光量は見ると落ちていき、夜の訪れを待つ準備段階へと入る。黄昏時が文字通りの誰そ彼時であるとすれば、それが通用するのは市街区でない場所だ。ほの暗さは人工灯によって駆逐され、喧噪に満ち溢れた夜の街に生まれ変わる。二十分とは掛からないそんな移行劇を、この展望スペースからは手に取るように眺めおろすことができた。高みから眺めると、ちっぽけな明かりに過ぎないのの一つひとつにはドラマがあるなんてことを、あの頃は考えていたはずなのだが、いまはひらべったい風景画にしか見えな

い。「いま何時だろう?」

歩いた道筋がよくわからないのと同じように、どのくらいの時間、歩いていたのかもわからなくなっている。以前の世界だったら折々のタイミングで時計を確認していたし、そうでなくても身体に染みついた感覚がだいたいの時間を教えて

くれていた。だが、そんな感覚は全く湧いてこない。店を飛び出したのが昼頃で、いまは日没を眺めているのだから、というふうには頭で考え始めると、山田に水を浴びせ掛けられたのが数日前だったようにも思えてくる。あれからいろいろな場所を歩き回り、いろいろな出来事を経験してきたような気もするのだ。何かに触ればそれだけで世界が変わってしまうことが恐ろしくなって自殺を試みたような気もする。しかし肉体がないのに触れる感覚が残っているのなら、仮に高いビルの屋上から飛び降りたところで、地上に叩きつけられて肉片が飛び散る痛みだけを感じて終わるのではないかと思いとどま

ったはずだ。首つりも考えた覚えがあるが、縊死の苦しみを経験するだけで死ねないなんて最悪だとつぶやいた記憶がある。死のうと思つて死ねなくて、夜になつて朝を迎えてを何度か繰り返したのではなかつたか。空腹を感じることもなければ疲れることもないのは、おそらくは肉体が失われているからだ。自分の目には手も足も見えているが、それらは本物ののだろうか。目に映る自身の姿、それが確かに存在していると言いつける自信はとおの昔に失せている。

気がつくと、夜景を目当てに訪れるカップルが目立つようになっていた。よそのカップルに気を遣つてやる筋合いはこれっぽっちもないとはいえず、姿形を持たない者が特等席を長々と占拠しているの

は宜しくない、退散するに如くはなし、と要はベンチから立ち去ろうとした。

「あれ?、俺の姿は誰にも見えていないんだよな、それなら、なぜこの場所に誰も座りに来ないんだろう?」

タダで夜景が楽しめるこの場所は安上がりのデートスポットとしては上等のクチだ。そのため多くのカップルが訪れ、それぞれに適当にスペースを見繕っている。ベンチが確保できるのは運のいい方で、そうでないと壁際などで立ちっぱなしになる。二人でいい雰囲気になるのは結構なことなのだが、どうせならゆつくり腰を下ろしたいと思うはずだ。なのに、姿の見えない要がいる場所に座りに来るカップルは、一組もいなかったのである。

要が占有していたのは一人分のスペースなので、そこに二人が無理矢理にでも座ろうとするのは、中途半端に混み合っている電車の座席で狭いスペースに身体をねじ込んでくるオバチャン族のよう、いくらか端ない。しかし要の隣もずっと誰かが座っていたわけではなく、見えない要と合わせれば二人分のスペースが空いていた時もあった。なのに誰も座りに来なかつた。いったい、どういうことなんだ?

「面白いところに気づいたな、お前さん」
背後から語りかけられて、要は振り向く。姿を失つてこの方、よその会話が自分への声かけであるかのように聞こえたことは何度かあるものの、すぐに勘違い

であることはわかった。でも今回のものは、頭の中に浮かんだ疑問に即答したかのように聞こえたのである。というより、かつての四谷氏や猫氏の時と同じ、声が耳に届くのとほぼ同じタイミングで、自身が掛け合いの片一方だという感覚が発生していた。え？、話し掛けられたんだよな、誰だ？と思って振り向いた要の目の前にいたのはタキシードを着た猫一だったのだが、きよんとしたまま固まった要の反応を窺うや、間違ったと考えたのか、

「タキシード猫が好きなんじゃなかったか、どんな姿になれば落ち着く？」

と言ひ、パツと淡い光が弾けたかと思うと普通の黒猫となった。以前の世界での記憶なのだが、全身の毛並みが真っ黒なのに首のあたりから前胸部にかけて白毛が混じる黒猫を「タキシード猫」と呼ぶ猫マニアがいることを知り、面白い言い方だと興味を持ったことがあった。しかしこんな状況下でことさらに持ち出されるほど強い印象だったわけではない。毛並みの特徴からそういうのではなく、文字通りの装いでタキシードを着ている猫が目の前に現れて、そういうえば昔、そんなのを描いたイラストもあつたかなと思ひ出した程度である。

「好きも嫌いも……お前、誰？、というか、とりあえず姿を一つに決めてくれたら有りがたい」

本当に自分自身が加わる会話なんだと

確認できたので、要は口を開いた。その言葉を発する間、目の前にいる話相手は、標準より横幅が強調されているピリケン像になったり、ふわふわ浮遊する発光体になったりと、忙しく姿を変えていたのである。

「ワールド・コーディネーター、お前さんに呼ばれたから出てきた」

「え、ワールド何だつて？」

「横文字は嫌いか、それなら『世界の調節係』でも呼んでくれ」

その姿を、狐をモチーフにしたような面長の背広男に落ち着かせた話相手は、そう答えた。

「その調整係さんが俺に何か用があるのか？、それより俺の姿が見えているのか」

「見えているから話し掛けてるんだわな、まあ、そんなに喧嘩腰にならないでもよろうつて」

確かに背広が言う通り、無意識のうちに相手を突き放す物言いとなっている。久しく誰とも言葉を交わす機会がなかったからだろうか。

「お前さん、説明を求めただろ、とりあえずはお前さんが訊きたいと思つていふことを教えるのが当面の仕事だな」

この世界には教えて欲しいことばかりなのだが、だからと言って教えてあげると言う狐っぽい背広にほいほい縋りつくのは危険すぎる。営業マンの勘みみたいなものがそう言っている。

「メチャクチャ疑われてるな、辛いこと

ばかりだったから仕方ないと言やあ仕方ないんだけど、よし、これらか儂が信じるに価するつてこと示してやろう、それでどうだ」

背広狐の顔つきや話しぶりからは疑わしさが消え去らない。よりによって、そんな怪しげな姿を選んでおいて、それで信じるというあたりが一番信じられない。ああ思ひ出した、以前の世界で見たジブリ映画に何かこんなイメージの詐欺師が描かれていたような気がするが、何だっけ……

「なるほど、お前さん、儂のこのカツコウが気になるわけか、お前さん、『平成狸合戦ぽんぽこ』が好きだったろう。最後の道行きのセリフを暗唱しようとしてたじゃないか。それであの映画のキャラにしてみたんだが、気に入らんか」

こちらが頭の中で考えたことを言い当てる能力は持つているらしい。しかしそれを具体的な行動に反映させる段階で奇妙な判断が混じるようだ。背広狐が指摘するように『平成狸合戦』は好きなアニメの一つだし、宝船で浄土に向かうシーンに使われている道行き文めいた長いナレーションは、落語風にアレンジすれば宴会芸になりそうなので練習をしたことはある。しかしそうしたことの延長線では、作中に詐欺師として登場する狐をお気に入りキャラと見做すのはホップ・ステップ・ハイジャンプのような判断だ。だが、その部分を差し引くなら、端っから拒絶

する理由はなさそうだ。

「じゃ、一つ頼む。普通の人には俺の姿が見えないんだよな、なのにこの場所に他の人がかぶさつてこないのはどういうことだ？」

背広狐の口元がニヤリと動く。その所作は疑わしさを倍加させるのだが当人は頓着してはいない。

「ああ、そうだな、確かに見えてはいない。しかしな、見えないにも二種類ほどあつてだな、お前さんをお前さんと認識できる人にとつての見えないと、赤の他人にとつての見えないは違うんだよ。最初のは、端的に言えばお前さんと認識があつた連中だな。勤め先で経験したように、連中にとつてのお前さんはこの世界では固体としても存在しない。空間を占有する何かにもならない、まったくの無存在だ」

「無存在……」
要は、その言葉だけを繰り返した。背広狐は続ける。

「そうだ、無存在だ。完全無欠の無なわけだ。でも赤の他人の場合は、そこまで綺麗さっぱり無かつたことにする必要はない。お前さんのいるその場所には、誰とは特定できないけど誰かがいることになつていふ。当人には何の関係もない誰かだな『誰でもない誰か』ってフレーズ、それに近いな。そうなるだけでお前さんはこの世界からいなくなつてしまふから、それで充分つてことだ」

「ややこしいな」

「わかりづらいなら黒衣のことを思えばいい。歌舞伎や文楽を見たことはあるな。あの舞台上に登場する黒衣は、物質的には舞台上に存在しているんだけど、観客の認識では存在しないことになっている。そこには誰もいないという暗黙の了解だな。赤の他人にとってのお前さんはまさにそれだ」

黒衣の喩えは話をさらにややこしくするつばいが、アニメの背景モブみたいなもの、展望スペースから眺めおろす街の明かりと同じと言えば、わからないでもない。それぞれには存在の意味があったとしても、見る人にとって共有する必要がないなら存在しないも同じということだ。パチンコホールの光景が目につく。遊戯台に向き合っている人々は自分の台だけに没頭している。複数で来ている連中がいけないではないが、おおかたはおひとりとさまだ。要がホールに入った時には、それぞれの一人ひとりが何者なのかは関係ない。ただ単に台を占有する何かがあるに存在している、その台には要は座れないと告げているだけである。

「パチンコがよかったか、まあ理解してもらえれば助かる」と背広狐は言った。気持ちの何割かは、まだこいつを信用し過ぎるなど囁いている。しかしその一方では知りたいことを教えてもらえないならという思いもある。どちらに付くべきかの判断はメトロノームの針のように

右へ左へと均等に揺れて定まらない。ただ、頭の中で思ったことが即座に伝わるのなら疑ったところで始まらないという割り切り方が次第に多くを占めるようになり、要は訊ねてみた。

「この世界のことをいろいろ知りたい。まずあなたは誰なんだ？、そしてそもそも俺は何者なんだ？」

背広狐はいままでの中で一番大きく口の端を持ち上げた。もう狐の顔にしか見えない。

「信用してくれて嬉しいなあ、何でも教えてあげるよ、それが俺の仕事だから。でもその前に一つだけ条件がある」

やはりそういう展開か。だがビジネスの取引でも、えびす顔を崩さない相手より、譲歩できるところ、取引になるところ、譲る気のないところを明確に切り分ける相手の方が与しやすい。どういう条件が出てくるかにもよるが、望む展開でもある。それにたとえ影をよこせと言いつつ出したところでも痛くも痒くもない。これ以上、失うものはないのだから。仮に何かを失って意識それ自体が消えて無くなるというのなら、それはそれでいまの状態よりは救いがある。

「そんなに構えなさんな、条件と言っても簡単なことなんだから。まあ、その前に俺のことを説明しよう。俺の仕事は世界を調整すること、言い換えるなら世界がスムーズに動くようにすること。具体的にはお前さんが気持ちよく世界に干渉

できるようにすること。だからお前さんが不安や言うんなら、そいつを退けてやるのが俺の役目ってことになる」

条件とやらが気になるが、背広狐の言葉が鵜呑みにするのなら、要自身は神様みたいに崇められているらしい。確かに要が何かすれば世界が変わるのだから、神様に近いところがないでもない。だが、こどもストリートに崇められると変なこ

そばゆさがある。

「おや、お前さん、自分の立場がわかってないのかな。みたいなやなくて、お前さん、神様になってるんだけどな。俺が出てきたのも、お前さんに呼ばれたからやわな。そこで条件だけど、お前さんが

知りたいことは教える、けど信じる信じないはお前さん次第、それをきっちり確認してほしい、ということ」

ついに神様宣言が出てきてしまった。しかし真偽判定の百パーセントがこちら任せというのなら、背広狐は何を言っても構わないことになる。すべての発言に責任を負う必要がないのだから言った者

勝ちの理屈だ。いまの神様宣言だけでなく、先ほどの見えないには二種類あるという説も含めて、結局はそれらを要がどう捉えるかに懸かっているのだ。なるほど狐らしい論理展開だ。背広狐、というよりも狐そのものの姿になっているの

だが、目の前のそいつは小馬鹿にしたような口調で言う。

「お前さん、もうわかっているんだろ、

俺が言ったことは全部、お前さん自身が考えていたことなんだって。それを他の誰かから言ってもらった方が落ち着くから、俺みたいなのを作り出してしゃべらせただけなんだって。そう、まったくその通り、全部お前さんの考えなんだわな……」

世界の調整係を僭称していた狐は、その他にもいろいろなことを語り続けたが、要の耳にはもう届いていない。姿形を失ってから初めて眠気に似た感覚を催していた。

◆◆ルーチン◆◆

いつもと変わらない朝、見慣れた天井。目覚まし時計のデジタル音に野田要は目を覚ます。

いつものルーチンをこなすように、朝食を摂り、髭を剃り、自転車を漕いで駅に向かう。人混みに苦悶する通勤ラッシュから解放されると、いつもと同じようにタイムカードを押して営業二課の部屋に入る。山田はまだ入社していない。小憎らしくなるくらいサボリのコツを心得たヤツだから出社も始業直前になる。毎朝、測ったようなタイミングで駆け込んでくるのだから驚くには当たらない。

いつもと同じで何一つ変わったところはない。それはわかっているのだが、何一つ変わっていないのだということ、ことさらに感じているのはなぜだろう。

世界をあるがままに受け入れることができたから元に戻るんだわな。誰かがそう

言ったように聞こえたけど、きつと気の所為だ。

業務日誌を開いて昨日までの納品状況を確認する。遅れているものはないし、至急指定の追加も入っていない。どうやら今日の外回りはいつもと同じように世間話だけで終わりそうな気配だ。まあ、こんなもんだ。どんなニュアンスで書いたのかは思い出せないんだけど、表紙に書き付けた「達観と諦観」の文字がいまの気持ちを言い当てている。(了)



編集後記

老いて初めて分かることが多い。この歳になれば、楽しみは気心の知れた旧友と盃を交わして、とりとめのない話を繰り返すことくらいだ。

酒がまわってくると、愚痴めいた話になり酔いに任せて支離滅裂な泥酔の世界におぼれてしまう。翌日は、地獄の二日酔いに悩まされ、自分の不甲斐なさに追然とする。

しかし、二日もすれば、すっかり忘れてまた酒の匂いに焦がれる。こんな事をずーと繰り返してきた。確かなのは浮草のように行く当てもなく漂っているだけの自分である。

母の葬儀の時にお経を唱えながら、不思議にも、唱和している般若心経の音を覚えていた。母は毎日仏間で般若心経を暗唱していた。田舎の家では御詠歌や般若心経は仏事の際に全員で唱和する風習があるから小さいころから慣れ親しんでいるお経なのだ、意味は知らない。

一度、不思議に思っって解説書を買って読んでみたがよくわからなかった。母もその意味を理解していたとは思わない。ただ何かしらの願いを込めて唱えることで一服の清涼感を感じていたように思う。

そんな般若心経なのだが、どういう訳だか般若心経の意味が分かった気分になった。そういう意味やったんか！やっぱ般若心経なんや！と自分なりに合点した。歳を取りいろいろと経験を重ねること、人生の面白さをまた一つ知った。

般若心経の世界は私を悩みの世界から一気に救い出してくれる魔法のようなおとぎ話の世界である。まかはんにやはらみたしんぎよう…。

MEMO

水の星

地球は奇跡とも言うべき水の星だと聞いたことがある。しかし、私のように水のなかに棲んでいると、自分を包む水の存在はあまりにあたりまえすぎて、その有り難さに思いを致すことはほとんどない。それはちようど、地上に生きるものたちが空気の存在にいちいち思いを致すことなく酸素呼吸をしているのと同じであろう。空気に思いを致さないようなら、我が身のあらかたが命を包む水であることを意識することはさらさない。まして己れが踏みしめ立っている大地も、それが揺れるか火を噴くかでもない限りその存在に目を向けることはない。要するに、ありふれたものに、あたりまえだと思ひ込んだものに目を向けずとも、その存在すら忘れていても、生きて行くことに特段の支障はないのである。

水の星
茨木のり子

宇宙の漆黒の闇のなかを
ひっそりとまわる水の星
まわりに仲間もなく親戚もなく
まるで孤獨な星なんだ

生まれてこのかた
なにが一番驚いたかと言えば
水一滴もこぼさずに廻る地球を
外からパチリと写した一枚の写真

こういうところに棲んでいましたか
これを見なかった昔のひとは
線引きできるほどの意識の差が出てくる筈なのに
みんなわりあいぼんやりとしている

太陽からの距離がほどほどで
それで水がたっぷりと渦まくので
あるらしい
中は火の玉だつていうのに
ありえない不思議 蒼い星

すさまじい洪水の記憶が残り
ノアの箱舟の伝説が生まれたのだらうけれど

善良な者たちだけが選ばれて積まれた船であつたのに
子孫孫のていたらくを見れば
この言い伝えもいたつて怪しい

軌道を逸れることもなく いまだ
死の星にもならず

いのちの豊穣を抱えながら
どこかさびしげな 水の星
極小の分子でもある人間が ゆえ
なくさびしいのもあたりまえで

あたりまえすぎることは言わない
ほうがいいのでしょう

驚いたのは、『水一滴もこぼさずに廻る地球』地球の自転速度は赤道上の速度にすると、四万キロ／日、時速では一六六六キロ／時間である。これは秒速では四六三メートル／秒となり、音速三四〇メートル／秒を超える。それでどうして地球は水をこぼさない？ また、『太陽からの距離がほどほどで それで水がたっぷりと渦まく』らしい。太陽からの距離がほどほどだと、どうして水が渦まくのだ？ まあいいか、考える時間は水の中にとっぷりある。

俳句

土田 裕

早春や余白ばかりのカレンダー
かすかなる光となりて雪の花
余寒なほ暫したためらふ書架整理
春浅し後ろ歩きの保母の声
天上に雲ほぐれゆく芽吹山

影山 武司

寒声や信濃の山へ身を反らし
笹鳴を追ひて深山の祠かな
骨董のカメラを覗く冬日和
蠟梅や媪二人の骨董店
初不動鈴振る列の一步かな
賽銭の音冴え冴えと瀧不動
凍空や天頂渡る蝕の月
冬晴や翼張ること跨線橋
猫も子も輪の中にをり日向ほこ
マフラーに日のぬくもりを結び止む